

昭和御遷宮記念

田代神社誌

福

祿

壽

康

寧

安

吉

昭和御遷宮記念

田代神社誌



編纂委員会





新社殿



本殿



拝殿正面



拝殿内部



上棟祭
昭和60年11月19日



新社殿初の例祭



島田鎮座稻荷神社遷御奉告祭記念
昭和57年 2 月 27 日



神明神社・稲荷神社御遷宮記念
昭和57年 2 月28日



田代神社御遷座三百八十五年御造営記念
昭和61年9月13日

“はじめに”

つつしんで御礼申しあげます。

多年の念願でありました田代神社御造営の完成を目のあたりにして、ただただ有難く嬉しく、身も心も清々しい神境に浮かぶ心地がいたします。

悠久一千有余年の昔から、広く厚き恵みをいただいた田代の大神様、ご神徳にこたえて苦難の歴史を切り開き、限らない前進を続けてきた私達の先祖、そしてあなた方の真心こもるご奉賛―神人一体のうるわしい祭の心が、ここに木の香もゆかしい新殿となって花開いたのです。

今回のご造営を「昭和の御遷宮」と名づけます。「慶長の御遷宮」以来三八五年ぶりの壮挙であります。そして、田代神社創建以来の歴史と、ご造営の歩みを「田代神社誌」として発刊することにいたしました。

社誌の内容は、

第一章「鳥居のうちそと（神社の現況）」

第二章「千年あまりの社史・伝承（神社の歴史）」

第三章「御造営奉賛会のあゆみ（昭和御遷宮の記録）」となっております。

ささやかな小冊子でありますが、御家族の皆様共々にごらんいただき、常に敬神愛郷の精神を持ち、心豊かな生活が営まれます様、祈りを込めてお届けいたします。

まことに有難うございました。

紀元二千六百四十七年（西暦一九八七年）

昭和六十二年十二月吉日

田代神社宮司 大橋 正廣



“社誌刊行を祝して”

岐阜県神社庁長 伊奈波神社宮司 宇都宮 正

田代神社は亙千余年の昔から、この郷土の祖先が尊崇しつづけてきた由緒深い神社で、今度御遷座三百八十五年記念 社殿大造営を機に、社誌を刊行されますことは、斯道のため又郷土の歴史研究の上にこの上なき喜びで、心からお祝い申し上げます。

郷土史とか神社の由緒の編纂といえ、普通その道の専門家に委ねるのが極くあたりまえのようになっておりますが、神社の由緒についてはその神社に奉仕する祀職が一番精通しておらねばならないことは言うまでもありません。この点大橋宮司は神明奉仕の信念と調査研究の熱意それに加えて実践力を兼ね備え然も県神社界に於いて現在第一線でご活躍の御方であり、この宮司を中心として、氏子の協力のもとに田代神社のまとまった社誌が始めて刊行されるということは、誠に時宜を得た業績でその情熱とご努力に対し深く敬意を表するものであります。

郷土の歴史の中核は神社の歴史であり、神社の歴史を知るといことは郷土の歴史を知るといことで、神社史を抜きにして郷土史を語ることは出来ません。そして神社誌の刊行は益々御神威を輝かし奉ると共に、氏子崇敬者の更に神忠を高からしめ、神社の栄えの跡を甦らせ郷土愛護の心を育てあげるものであり、ひいては国の歴史と伝統に関心と愛着を深め、我々の祖先が神を「心のふるさと」「魂の根元」としなければ真の日本人として生きていけないというこの「すばらしい生き方」を子々孫々に伝える唯一の礎になるものと信じて疑いません。

可様な感想と希望を以って、今回の社誌刊行に対し深い敬意と讃意を捧げるものであります。



「謹んでお祝い申し上げます」

前岐阜県神社庁長 南宮大社宮司 宇都宮 敢

天皇陛下御在位六十年と言う輝かしい年に、田代神社様には、御神域を拡張整備され、広大な御社殿の大造営を完成され、御神威一際高く大ましますことを、何よりとお慶び申し上げます。

これは大橋宮司様が、遠い御祖先から承け継がれて来た生命を、この盛事一つにかけて悲しみも苦しみも、これぞとばかり貫き捧げられて来た精魂の結晶と拝します。それと今一つ、御先祖等が代々捧げられて来た御奉仕の念願が、現宮司様の上に深く結ばれての仕業と深い感動を覚えています。

先々代大橋平三郎様は、明治南宮大社に神勤され、時の神道学者蒲生宮司の許に勉強され、「南宮神社集説」と言う文献史料の編纂をされる程の篤学の神職でありました。その薫陶を承けられた先代直廣宮司様は、御名に違わず勤厳実直のお人柄から、広く衆望を担われ、戦前神職としては数少ない奏任待遇を受けられた方でした。その御祖先等のみ心栄えが、この御社殿の上に、ありありと重映されていますことを、見落すことはできません。神に導かれ、祖先に励まされ、日夜ひたすら精進されて来られた宮司様の、神仕えの歩みの跡に、限りなき鑽仰の念をかき立てられます。

この度、御造営に続いて、多年調査研究された資料を以って「田代神社誌」を発刊されることになりました。これは御造営になった御社殿に更に「みがき」をかけられた仕上げの業であり、これに依って御由緒は一段と神々しく、御神徳とこしえに輝きますことと存じます。

古言に言う「神は人の敬に依って威を増し、人は神の恵みに依って運を添う」の名言通り、郷土高田の町の盛運の靈気は、この御造営と社誌編纂に依って、永遠に栄えますことを、心からお祝い申し上げます。



“ご挨拶”

田代神社御造営奉賛会長 山 田 良 造

浅学非才の身とは充分知り乍らも田代神社御造営奉賛会長をお引き受け致し申しわけなく思い乍ら、皆々様の御好意と御芳志に甘える事となりました。その間色々と問題もありましたが、皆さんの意見の一致した事は千年余りの社歴に恥じない御造営をしたいという一点でありました。従って当初の計画も何回となく修正をされ、若干の工期の延長という結果になりましたが、この点も氏子崇敬者の御理解を頂き漸く所期の目的を達成する事が出来たと思います。この間各位には応分以上の御芳志を賜わりまことに有難く厚く御礼を申し上げます。私にとりましては大変多くの皆様と友達となる事が出来ました事と、本業以外ではこれ以上の仕事をさせていただくことはない仕事であったと深く感謝を致します。この上は私共のこの御造営により、田代神社の御神徳が氏子崇敬者の皆さんに遍く行き廻り、それぞれの事業、家運の隆昌へと伝わって行く事を願うものであります。大変有難うございました。



“社誌刊行にあたって”

田代神社総代長 細川 勇

昭和六一年九月十三日、初秋の澄みきった空に奉祝の花火の合図で、田代神社御遷座三八五年記念大祭並に御造営竣工奉祝祭が初まったのでありました。

大神様には三八五年の歳月を経た古殿から、今度木の香も馨る新しい本殿に御遷座なされて、さぞかしお喜びの事と拝察致します。

過ぎて来ました幾年月をふりかえり見ますと氏子の先輩達が紀元二六〇〇年（昭和十五年）に際し多年の懸案であった田代神社御造営事業を計画されましたが、残念ながら達成する事は出来ませんでした。其の後昭和五六年当時の田代神社総代会で神明神社、稲荷神社御造営委員会が結成され両神社の本殿が新築され整地も進み皆様方の浄財で第一期工事が終わったのであります。

昭和五七年十二月十日前委員全員で田代神社御造営準備委員会が結成されました。本年は天皇陛下御在位六十年のお目出度い年でもあって準備委員の努力により昭和五九年四月一日田代神社御造営奉賛会結成奉告祭が行われたのであります。

会長に山田良造氏を戴き役員一同が会議を重ね見学もし協議し討論もして真剣に工事を進めて参りました。其の間五九年七月一日の起工奉告祭を初めとして幾度かの神事が行われましたが、九月十三日の奉祝祭御遷座祭等二度と経験出来ない又求めても得られない神事に参加させていただき誠に光栄と深く感謝申し上げる次第であります。私達の喜びは奉祝祭当日の餅撒きの行事となり又翌日の六〇〇人余りの稚児社参の行事となったのであります。

氏子の皆様、崇敬者の方々の御厚意、請負業者の献身的なご努力、役員の労力は勿論のこと特に大橋宮司さんの日夜の身も細る献身的な御盡力、皆さん方のお力添えの結果信仰の場所にふさわしい芸術作品ともいえる荘厳精緻な御神殿が新築されたのであります。

氏子の方々の長年に亘る念願であつた御造営が大神様の御神徳によつて達成されました。皆様と共に御祝申し上げ、皆様方に唯々感謝の気持ちで一杯であります。

今度の御造営に度々の神事に参加させて戴き御神徳の益々奥深しに心打たれ吾々日本人の敬神生活のどんなにか大切であるか改めて己の身にひしひしと感じました。

私達の氏神様の田代神社に参拝し、又家の神棚の前に立つて謹んで礼拝して大神様の恵みと祖先の恩とに感謝し、世界の中の日本人としての自覚を高め、世の為人の為に奉仕することが世界人類の平和に貢献することではないでしょうか。今度田代神社誌が発刊されることになりました。皆様方の日常生活に少しでもお役にたてばと願ひいたします。

目次

◆口 絵	
◆はじめに	(田代神社宮司 大橋正廣)
◆社誌刊行を祝して	(岐阜県神社庁長 宇都宮 正)
◆謹んでお祝い申し上げます	(前岐阜県神社庁長 宇都宮 敢)
◆ご挨拶	(田代神社御造営奉賛会長 山田良造)
◆社誌刊行にあたって	(田代神社総代長 細川 勇)
第一章 鳥居のうちそと	
― 田代神社現況 ―	1
一、田代神社を訪ねて	3
(一) 表参道から	
(イ) 田代神社本殿	
(ロ) 渡り殿	
(ハ) 幣殿	
(ニ) 拝殿	
(ホ) 向拝	
(二) 北参道から	
(三) 南参道(いなりみち)から	
第二章 千年あまりの社史・伝承	
一、創立年代より	11
(一) はじめの名は国津明神	
(二) 田代冠者の崇敬	
(三) 慶長の御遷宮	
(四) 宮寺の創立	
(五) 棟札にみる社史	
(六) 祭礼の盛衰	
二、江戸時代以降の境内神社	16
(一) 御鋤神社について	
(二) 稻荷神社について	
(三) 金刀比羅神社について	
三、明治維新以後	20
(一) 神仏分離	
(二) 高田三百年祭など	

四、歴代宮司の変遷	23
五、棟札	27
六、宝物(一)	30
七、宝物(二)	31
八、境内工作物	34
九、境内樹	35
十、太鼓組・献燈組	36
十一、どじょう踊り	42

第三章 御造営奉賛会のあゆみ

―昭和遷宮の完遂―

一、昭和五年度の御宮繕について	45
二、苦節五十年の開花	45
(一) 終戦まで	
(二) 戦後の復興	
(三) 御造営日誌	
(イ) 第一期事業(昭和53年～58年迄)	
(ロ) 第二期事業(昭和59年～62年迄)	
三、第一期御造営のあゆみ(写真集)	59
四、本工事を目前とした田代神社(写真集)	61
五、第二期御造営のあゆみ(写真集)	63

六、本殿遷座祭以降(写真集)	70
七、田代神社役職員一覧	76
八、氏子・崇敬者一覧	78
(一) 氏子一覧	
(二) 崇敬者一覧	
九、御造営に寄せて	94
起工式に参列して	

(岐阜県神社庁副庁長 森 磐根)

幽玄の宵

御遷座祭を拝観して

(麦房神社宮司 高木清治)

十、若竹学園のこと―社史余録―	98
(崇敬者 会社社長 岩間 泉)	
十一、田代神社祭事年番組一覧	101
資料編	

昭和御遷宮第一期事業	104
御造営決算報告書	
稻荷神社工事設計図	
神明神社工事設計図	
昭和御遷宮第二期事業	106
収支決算書	

田代神社社殿立面図・平面図・断面図	112
田代神社社務所立面図・平面図(宮司試案)	114
文化財指定書	115
山姥図解説	116
太鼓組表彰状	117
昭和御遷宮扇子	123
田代神社算額資料	124
あとがき	124

第一章 鳥居のうちそと

—— 田代神社現況 ——

通称「田代さん」で親しまれている田代神社は、岐阜県養老郡養老町高田に鎮座しています。

高田の本通りが東西に走り、老舗が軒を連ねている東・中・西町。その真中あたり「中町発展会」のネオンの手前を北に折れ、一五〇メートル程行くと、左手に石玉垣の並ぶお宮があります。それが、田代神社です。

田代神社から、東へ七〇〇メートル行くと近鉄養老線の「美濃高田駅」があり、北方六〇〇メートルには、牧田川に沿う輪中提防がゆるいカーブを描いています。遙か西北の伊吹山から、南西につながる養老山脈が高田の町の屏風となっています。

以下、この章では、田代神社の現況について、ご案内したいと思います。

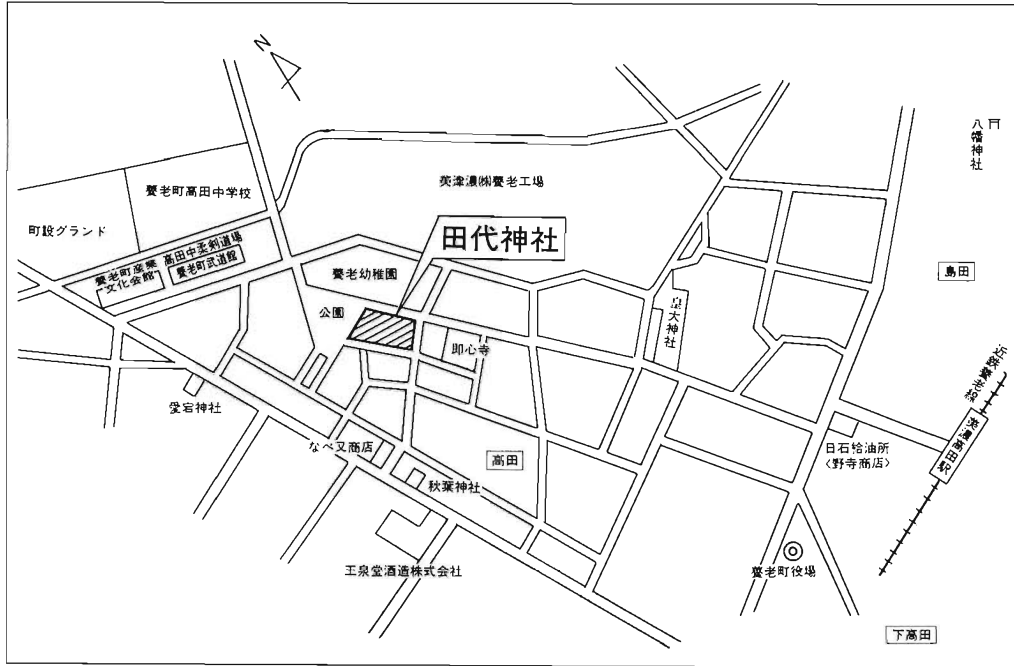


養老山脈を眺む



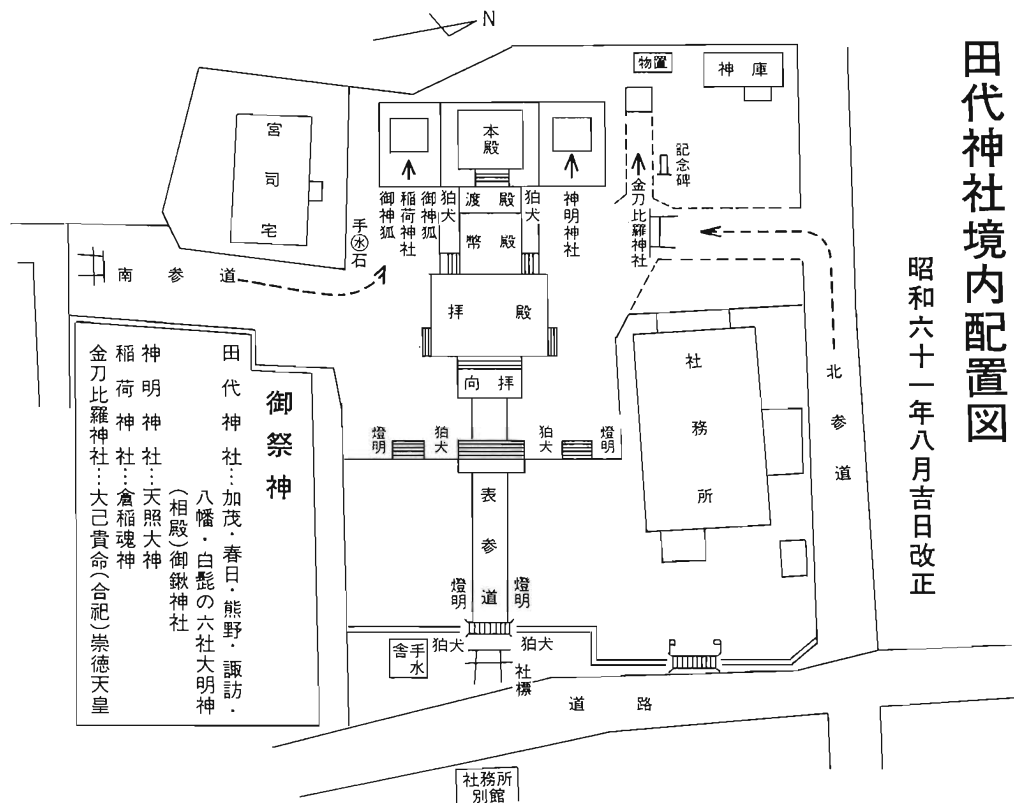
美濃高田駅

田代神社位置図



田代神社境内配置図

昭和六十一年八月吉日改正



一、田代神社を訪ねて

(一) 表参道から

「田代神社」の額のかかる明神鳥居がそびえ立つ表参道。表参道の正面にある一番大きな社殿がこのお宮の主神（本社ともいいます）「田代神社」です。そして

両脇にある小さい社殿は、田代神社の家族の立場になる神様で、これを境内神社といえます。

向かって右に、「神明神社」。向かって左が「稻荷神社」です。

さらに、神明神社の右や後方にもう一回り



明神鳥居



社号標

小さい社殿があり、これは「金刀比羅神社」といいます。

つまり、このお宮は、本社である田代神社と、境内神社として、神明神社、稻荷神社、金刀比羅神社から成り立ち、これを総称して宗教法人「田代神社」というのです。

田代町の大通りに面して、東に向かって立っている明神鳥居には「田代神社」の額がかかり、その右前に社号標があります。

社号標には「(郷社) 田代神社」の文字が彫ってありますが、(郷社)の文字は、昭和二十年の、神社制度の

改正によって抹消してあります。

裏面には

「明治廿五年新嘗祭日
にいなめさい

從四位勲三等巖谷修書」

と、刻されています。

鳥居の前には、道路を隔てて東側に社務所別館があります。今は物入れになっていますが昭和十二年に御造営会議などの会場が必要ということで新築されたものです。

鳥居の、向かって左側に、手水舎てみずしやがあります。四本柱の屋形の中に手水盤があり、龍たつの口からはいつも清せい冽れつな水が流下しています。



狛犬

参拝の前には、備え付けの柄杓ひしやくで手を洗い、口をすすいでください。これを「手水の儀」といいます。

さて、御手洗みたらし

川にかかっている石橋を渡りましょう。左右にずらりと石玉垣が並びます。これは昭和三十三年三月、氏子が一本一本名前入りで寄進したものです。石橋の手前には大狛犬こまいぬが一对あります。

※狛犬とは

神社の社頭や、社殿の前に魔よけのために置かれます。狛犬こまいぬとは「高麗犬」の意味で、獅子に似た獣で、口を開けているものと、閉じているものが対になっています。

参道へ入ると、まず左右に石燈籠があります。寛政五年癸丑みずのとし八月、氏子一同により寄進されたものです。更に進むと、一段高い境内地が続き、社殿その他の主要建物が並んでいます。前面に黒御影くろみかげの石積、その上に中玉垣が並び、三ヶ所に石段が設けられています。

石段を上がります。狛犬と石燈籠がそれぞれ一対ずつあり、いよいよ参拝の場所へ着きました。

中央の奥から田代神社の本殿、渡り殿、幣殿、拝殿、向拝こうはいへと続きます。

向拝の下、賽銭箱の手前で立ち止まってください。
二拝、二拍手、一拝の作法で参拝いたしましょう。その後、向かって右の神明神社、向かって左の稻荷神社へと参拝の歩を進めてください。

つまり、神社が四社鎮座されているのですが、参拝の順序は適宜でけっこうです。

それでは、中央の社殿について説明しましょう。

(イ) 田代神社本殿

流れ造り、木造朱塗で、古式をそのまま残した造りになっています。

格子戸のある中心部の建物が間口一間（一八二cm）、奥行五尺（一二五cm）で、高欄の縁をめぐらしてその前に御拝柱と階段があり、屋根は銅板葺となっています。

この中に左の六社が祀られています。

（神社名）（祭神）

加茂神社 別雷命

春日神社 武甕槌命・経津主命

天兒屋根命・姫神

熊野神社 家津御子神・速玉男神・熊野久須美命

諏訪神社 建御名方神
八幡神社 應神天皇
白髭神社 猿田毘古神

実は右の六社の他にもう一社（相殿の神）合祀されているのです。

御鋏神社 天照大神



田代神社本殿

(ロ) 渡り殿

間口二間（三六四cm）、奥行一間（一八二cm）の木造、屋根は銅板葺です。建坪は二坪（六・六二㎡）。

(ハ) 幣 殿

中心部は間口二間(三六四cm)奥行二間(五四六cm)で木造、瓦葺屋根です。屋根が重層になっています。両脇に間口四尺五寸(一三六・五cm)奥行二間(三六四cm)の間があり、向かって右が楽人席、左が神饌所、神具置場で、更に前方両側に一間幅の出入口の階段があります。合計建坪は一〇・五坪(三四・七八㎡)になります。

(ニ) 拝 殿

木造間口四間(七二八cm)奥行三・五間(六二七cm)建坪一四坪(四六・三七㎡)、屋根は瓦葺で入母屋造になっています。殿内は二十八畳の畳敷で、旧拝殿の二倍の広さになりました。内に虹梁・斗拱、外に彫刻がぐるりととりまきます。注意してよく見て下さい。又、屋根の鯰、鬼瓦、破風下の懸魚なども社殿の壮嚴さを保っています。

(ホ) 向 拝

木造で二本の太い御拝柱、瓦屋根で唐破風を前面に

左右に絶妙の曲線を描いています。正面鬼瓦を中心に竜の瓦がはっているのがわかりますか？ 欄間の彫刻も見事です。

なお、上段の境内地には玉砂利が敷き詰められていますが、各建造物の下は堅固な基礎コンクリートが鉄筋入りで深く沈められ、社殿を幾百年磐石の安きに支えているのです。

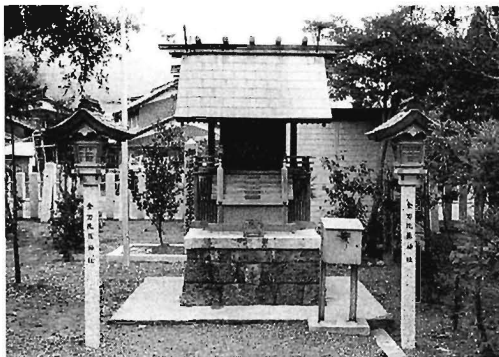
(二) 北参道から

旧高田小学校の校門のあったあたりから西へ入り、更に外玉垣を左右にひかえた出入口から左へ入るのが北参道です。やや奥まったところに石造の神明鳥居が建っています。柱中心部の幅二七〇cm高さ約三五〇cmですが、上の笠石がどつしりと太く、幅四五〇cmもあります。くぐって左の石柱を見ると

「若竹学園同窓生一同」



神明鳥居



金刀比羅神社本殿

に神庫があります。木
玉垣の西北の角の内側
社です。その又右、外
坪〇・一坪（〇・三五
口二・一尺（六四cm）建
坪〇・一坪（〇・三五
㎡）これが金刀比羅神
の社殿があります。間
の社殿があります。間
北（右）やや後寄りに
やはり神明造の小ぶり
大神です。この神様の
おみかみ
祭神は天照
あまてらす
〇㎡で、



神明神社本殿

とあります。さらに南
へ進むと幣殿につき当
たりますが、その手前
で右に向くともう一段
高い社殿の敷地があり、
内玉垣の中に神明神社
が鎮座されています。
神明造の社殿は間口
三尺一寸（九四cm）建
坪〇・二一坪（〇・七
〇㎡）で、祭神は天照
あまてらす
〇㎡で、



稲荷鳥居

西町の商店街を東進
し、右手に郵便局を見
て更に二〇m行き、八
百屋の角を左折すると
約五〇m北に赤い鳥居
が見えます。ご存じ稲
荷さんのシンボルです
ね。この鳥居をくぐり
なだらかな坂をゆっく
り歩きましょう。これ

が「いなりみち」なのです。前方に拝殿が側面を見せ
てそばえ立ち、左へ曲がりなさいよと指示している様
です。その曲がり角の左側に「洗心」と彫ってある手
水石がありますので、手水の儀（四頁参照）を行って
下さい。玉砂利の感触をたしかめながら参進すると、

造瓦葺屋根の建物で間口四間（七・二m）奥行二間（三・
六四m）建坪八坪（二六・四㎡）です。この中に御遷
宮用の仮殿も設けられています。

(三) 南参道（いなりみち）から



稲荷神社本殿

かわいらしい一対のお狐さんが迎えてくれます。表に「奉」「納」裏に「昭和五十八年九月吉日」「崇敬者一同」の文字が見えるでしょう。さあ、石段を登りましょう。間口三尺(九一cm)、建坪〇・二坪(〇・六七㎡)の稲荷神社の本殿前に着いたのです。参拝がすみましたら、狐や兎などの彫刻や建物の姿をゆっくりごらん下さい。

二、田代神社概要

田代神社について

- 名 称／田代神社(宗教法人)
- 通 称／田代さん(「六社大明神」とも言う)
- 所在地／岐阜県養老郡養老町高田二五九番地の一
☎〇五八四三―二―〇六五四番
- 職 員／二名(宮司一名、祢宜一名)
- 氏子総代／田代神社十一名 任期三年
稲荷神社 四名 任期三年
(但し、右二社は昭和六十三年五月法人合併し、田代神社一社となる予定)
- 神事係／氏子区域各組に一名。合計三十一名。任期は各組により差異があります。

(※資料参照)

※資料 神事係任期(三十一カ町)

一年 中組・井口組・高北・高南西・高南東・東町

常盤町・永和町二班・宮西町・田代町・昭和町

中町・東洋町西・協進町下北浦・協進町蓮寺

下川原町・城前町・相生町・御所町・神明町

二年 元町

三年 永和町一・三・四班・南町東組

不定 西町の西・西町の東・東洋町東・大和町

大正町・松山町・栄町・馬場町

昭六二・十二・一現在

三、年間神事その他の行事

一月一日 歳旦祭さいたんさい

年の始めに当たり、初日の光と共に大神の御神威を一層仰ぎまつる。

一月十五日 左義長さぎちやう

古神符、御守札等を浄火で焼納する。

二月十一日 紀元祭きげんさい

神武天皇ちゆうこくの肇国の大業を偲び、日本の建国を祝う。

二月十一日 祈年祭きねんさい

五穀の豊かな実り、産業の発展を祈る。

四月一日 稻荷神社例祭

稻荷神社一年に一度の大祭。

四月一日 金刀比羅神社例祭

金刀比羅神社一年に一度の大祭。

六月三十日 大祓おおはらえ

一年前半の罪穢つみけがれを祓い浄める神事。

八月二十日 御歟神社例祭みくわ

農業の守護神である御歟大神の御神徳を称え、

御守護を祈る。献灯、太鼓奉納あり。

九月秋分の日 前日 試楽しらく

翌日の例祭を恙無く斎行させていただく様、祈念する。

九月同日 田代神社御遷宮記念祭

昭和六十一年の御遷宮を記念する祭。

九月秋分の日 例祭

神社の三大祭(祈年祭、例祭、新嘗祭)の中で最も重要な祭。太鼓、献灯、どじょう踊りの奉

納がある。

十月一日 神明神社例祭

地主の神である神明神社の一年に一度の大祭。
献灯及び太鼓の奉納がある。

十一月十五日前後の日曜日 七五三祭

三歳男女、五歳男、七歳女兒のすこやかな成長
を感謝し祈る祭。

十一月二十三日 新嘗祭

新穀をお供えして、五穀の悠遠な根源を顧みる
と共に、広大な神恩に感謝する祭。

十二月上旬 神宮大麻並びに田代大神神符頒布始祭

本宗である皇大神宮の大麻と産土大神の神符を
来年一ヶ年間各家庭の神棚に奉斎するため、そ
の頒布始の祭。

十二月中・下旬の日曜日 門松立て奉仕

祭事年番、氏子総代以下有志による奉仕。

十二月三十一日 大祓

六月の大祓に続き、本年後半の罪穢を祓い浄め
る神事。



七五三祭



年番用具

祭事年番／氏子区域を三ブロックに分けて、一年交

代でブロック内の氏子総代、神事係が年間神事
を取持ち、奉仕します。特に、例祭の奉納余興と
して、「どじょう踊り」の企画運営が祭事年番第
一の任務です。

祭事年番の中で、太鼓を有する組を太鼓年番
と言い、例祭ではその太鼓を櫓に曳き上げて「ど
じょう踊り」の拍子を打ちます。

第二章 千年あまりの社史・伝承

一、創立年代より

田代神社……私たちの先祖が、このお宮を創立したのは、はるか千年以上も前のことです。残念ながら正確な年代はわかりません。

ただ、本殿の奥深く鎮座します六社明神みょうじんと呼ばれる神様たち、そして古宮ふるみやという字名あざなの残っている跡地の存在が、物言わねど、この古い古い歴史を物語っているのです。

御神体みたましろ（みたましろ）は神社信仰の核心であり、神聖を保つ心得として、一般公開は出来ないことになっています。

それは創立当時の名工が精進しやうじん潔斎けつさいしてお刻きざみした木彫きぼりのお像すだたで、平安時代（七九四―一一九二）の作と思われます。

ですから、田代神社の歴史が千



古宮跡地

年であるというのは、これを根拠としているのです。
この章では先人たちの書き残した記録や言い伝えをもとに、田代神社の歴史をたどってみましょう。

(一) はじめの名は国津明神

第六十二代の天皇であられた村上天皇の頃（九四七―九六七）に編纂へんさんされたという、美濃国神名帳みののくにしんなうちょうに多芸郡たぎごほり十六社の神社が載のせてあり、その中の一社「国津明神くにつみょうじん」は田代神社のことであろうとされています。

創立当時、国津明神という名称でしたが、その後、兵火水難に遭あい、世の中が激変してゆくうちに、その名は忘れられ、六社をお祀まつりすることから誰いうとなく六社明神と俗称する様になったのでしょうか。

(二) 田代冠者の崇敬

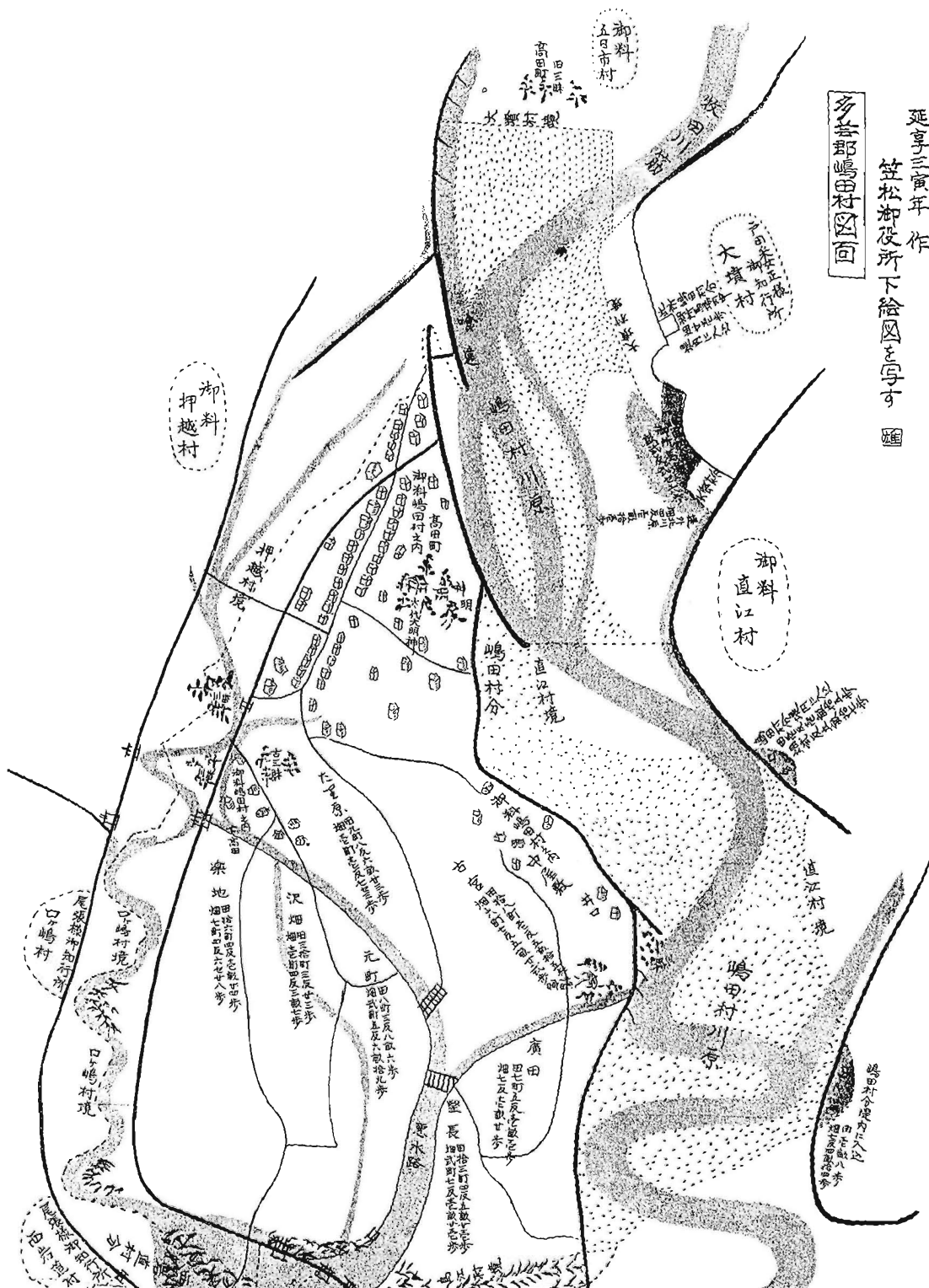
第七十九代六条天皇（一一六六―一一六八）、第八十代高倉天皇（一一六九―一一八〇）の頃、多田頼成ただよりなりという人が親戚を頼って高田（嶋田村しまだ）へやってきました。

延享三寅年 作

笠松御役所下絵圖を写す

圖

多芸郡嶋田村図面

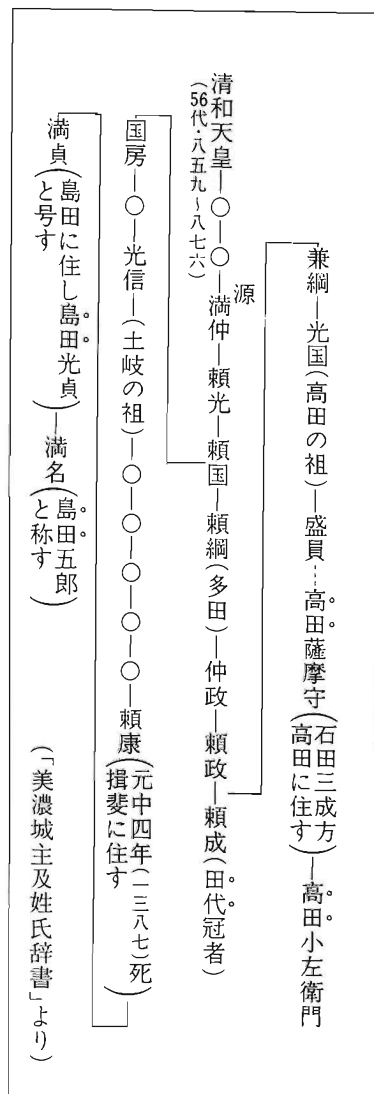


嶋田村古図

者頼成」と名乗

(三) 慶長の御遷宮

関ヶ原合戦の翌年慶長六年（一六〇一）に、大洪水があり、たび重なる水害に堪えかねた住民は、とり敢えず神様だけでも安全な場所へお遷し^{うつ}せねばと決心して、その年の十二月二十六日、古宮から現在の社地へ御神体を背負ってお運びしたと言われています。人家も続々高地へ移転し、「高田北新堤」を築いて洪水をくい止めようとしました。慶長六年から八年（一六〇三）



ともあれ、今迄よりは安全な地に御遷宮が出来ました。実はこの北浦きたうらの社地には、古くから神明神社がありました。つまり神明さまの境内地へ田代さんが避難されたのですが、二つの神社が末長く一緒に住もうということになり、以後昭和六十一年までに三八五年経過したわけです。関ヶ原の戦で手柄をたてた徳永寿昌よしまさという殿様が、当時あらたに嶋田村しまだを始めこの地方の村々を支配することとなり、高須を居城として、慶長六年から城郭の修築を行い、領内の政治をすすめる中

にかけてが住民
の大移動期だっ
たわけで、今の
島田は字本郷と
多口（もと「宅
地」と書いた）
から、高田は字
元町から、下高

で、神様を大切にする先例にならって田代神社へも土地を寄進し、社地を広めました。

(四) 宮寺の創立

話は前後しますが、昔神明神社の社僧（神主とお坊さんを兼ねた人）に行透法印という人があり、慶長元年（一五九六）、神明神社の傍らに寺を建てて大善院と名付けました。行透はこの大善院に住んで、ご本尊の薬師如来、神社の方の天照大神、つまり神様と仏様の両方に仕えて祝詞を奏上しお経をあげていました。この事は神仏混淆（習合ともいう）といって、神仏は互いに求め合い、融合調和するものという信仰があり、最古の例として、霊龜元年（七一五）、藤原武知麻呂という人が越前国（福井県）の気比神宮のために神宮寺を建てたこと、又、天平時代（七〇八―八〇〇）に仲山金山彦神社（今の南宮大社）に宮処寺が出来たことなど、全国に多数の例があります。その後寺号を寿命院と改め、次の社僧（別当ともいう）の澄芸法印に引き継ぎます。

田代神社遷座の時、導師となったのはこの澄芸法印で、その時の棟札はおそらく彼の自筆と思われるが、

このお宮に残る最古のものです。その次の社僧（別当）祐賢法印の時、寺号を又改めて寿命院と称することに、山門横川（しやうりやうせん）の首楞嚴院の末寺となりました。その時の証明書として首楞嚴院別当総代、法印大僧都圓興（だいてうざえんこう）の名で出された「本寺後證」があり、元禄五年壬申年（一六九二）九月十八日という日付が記されています。

本寺後證

奉寄進社領

本寺後證
儀別多難郡嶋岡公人の神主
社僧奉命院長自任古雅
天皇家古寺未定故予收
依當在増修若我今在許
山門首按嚴院之末寺在
因請稱号相改号本寺在
永身遮那止觀要業必不
混他門風儀仍今修在
如件
元禄五年 首楞嚴院別當
九月十八日 法印大僧都
壽量院

奉寄進社領
本寺後證
元禄五年
三月十五日
大僧都
伴と無三

(五) 棟札にみる社史

ここでご遷座以来の歴史を棟札から抜き出してみましょう。ちなみに棟札というのは遷宮その他の重要な行事の行われた時に、その内容を板に墨書^{ぼくしよ}して記念とするもので、神社造営の上棟式の時、棟木に打ちつけることから名付けられたのです。特殊なものとして銅製や瓦製のものもあります。

後述します二十九枚の棟札と、その後の記録を調べてみると、私たちの先祖の厚い敬神の真心が脈々と受け継ぎ、伝えられて来たことがわかります。命からがら大神様をお遷した慶長六年から六十九年間に、本殿を三回建て替えています。ということは、最初の本殿は仮住まいの簡素な建物だったのではないのでしょうか。戦乱と洪水に打ちのめされ、人々の生活は随分苦しかったに相違ありません。しかし、高須の殿様が社地を寄附して、「一層氏神さまを大切にせよ」と励まされたこともあり、苦しい中にも敬神の心が失われることは決してなかったのです。

寛文十年（一六七〇）に建て替えられた本殿は、決定版とも言うべき見事な社殿でした。以後昭和六十一

年（一九八六）の建て替えまで実に三一六年間、その時の社殿が残されていた事実からも、寛文の造営の本殿がいかにすばらしいものだったかが想像出来ます。明治初年（一八七五前後）に作られた「美濃国第四大区、石津、多芸二郡之内、由緒有之神社明細調」にも田代神社の社殿をほめて次の様に書いてあります。

「此高田町は中仙道関ヶ原駅より石津郡牧田村へかかり、ここを経て烏江村より牧田川の船路を伊勢尾張へ行く道筋なり。今此辺を高田街道と云。高田町は家並多くよきところなり。故に当社は氏子数多ありて崇敬尤深く、社殿殊に壮麗なり。」

(六) 祭礼の盛衰

さて、この見事な本殿が出来てから、日本史の上では三十二年後の元禄十五年（一七〇二）には「忠臣蔵」で有名な赤穂浪士の討入りがあり、享保の改革（新田開発の将励等）（一七二六）享保の大飢饉（一七三二）などの事件を経て田代神社にも宝暦九年（一七五九）ごろ、氏子間の意見の相違から祭礼が淋しくなるといふ事件が起りました。その反動として、西町の愛宕神社の祭礼が盛んになり、宝暦十二年（一七六二）愛宕

神社御旅所を創立、軛^{くま}三輻^{くわふく}を供奉^{くわんぷ}しての御神幸を行うこととなりました。その頃、田代神社では旧暦八月十一・十二日が例祭日で、献灯やどじょう踊りが行われていたのです。同じ島田村（高田）の氏子が二つの神社を崇拝するのはよいけれど、心が通わなくては残念というので、昭和二十五・六年（一九五〇～五一）ごろから、五月の愛宕神社例祭を「高田の春祭」、九月の田代神社例祭を「高田の秋祭」として仲良く盛大にやりましょう、という申し合わせが出来て今日に至っています。

二、江戸時代以降の境内神社

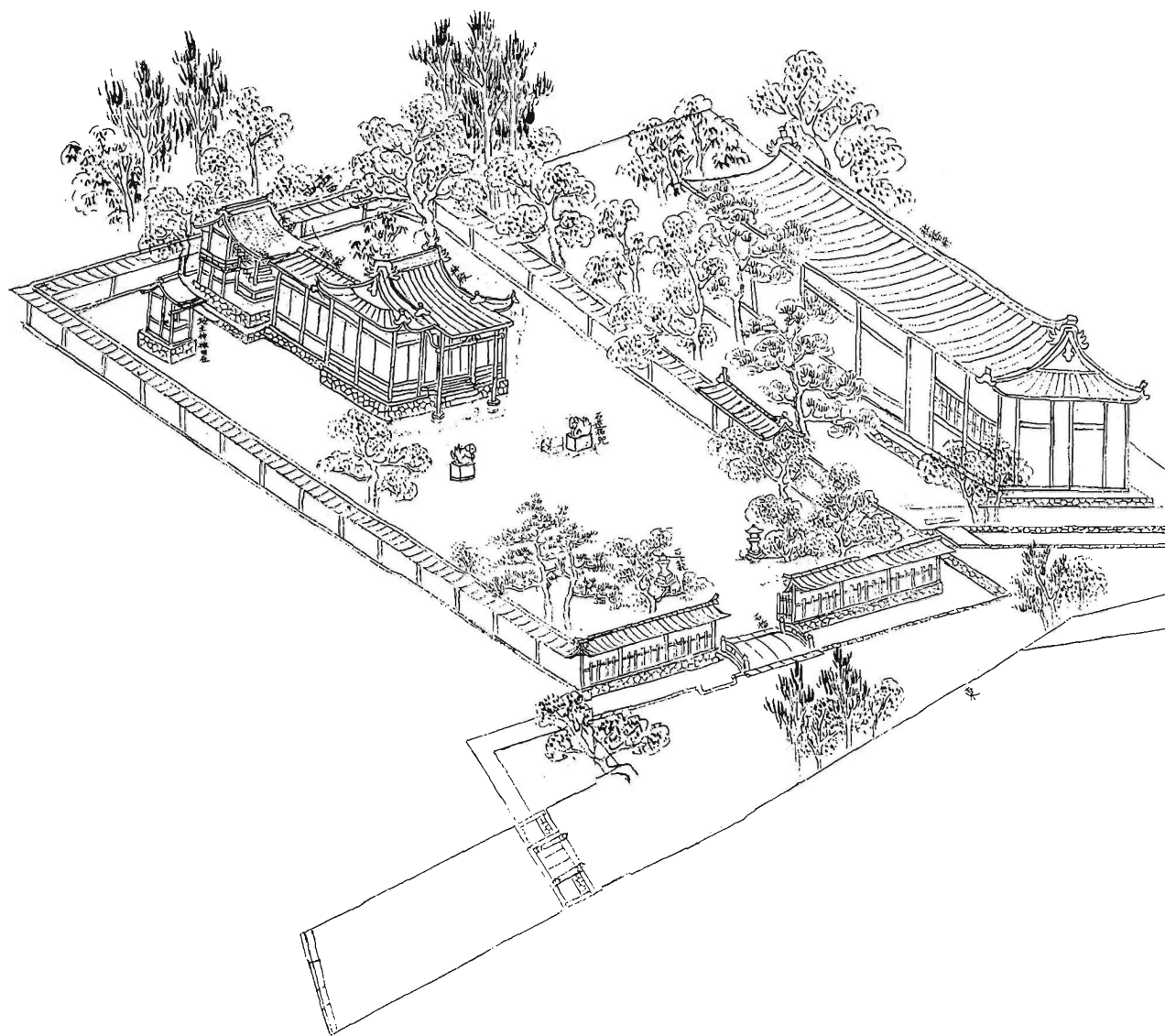
（一）御^み^{くわ}^わ神社について

江戸時代の一時期、全国的に^{くわがみしんどう}御神信仰が盛んになりました。これは伊勢神宮の神田をたがやし、種をまく時に「^{くわがみしんどう}御神田」というお祭りが行われることが基になって、お伊勢さんの農業に対する御神徳を仰いで、各地に御^み^{くわ}^わさんとしてお祀り^{まつ}する様になったのです。

田代神社にもその頃安永年間（一七七二～一七八〇）

伊勢の御師^{おし}（御神徳を広める為全国へ出向いて活躍した祈禱師）の一人である世古淨太夫という人が、この御^み^{くわ}^わさんを御本殿の中へ納め、氏子等はそれ以来毎年お祭りをする様になりました。「お^み^{くわ}^わさん」と言っても、祭神は天照大神^{あまてらすおみかみ}さまなのです。古い記録によると、ここの御^み^{くわ}^わさんは「伊^い^{ざわ}皇大神宮―五穀成就……」と記されていますので、御本社三重県志摩郡磯部町の伊^い^{ざわ}雑宮（皇大神宮の別宮）です。もとは旧暦の七月二十日に例祭が行われていましたが、昭和十二年から今の暦の八月二十日に行われる様になり、大切な農業の守り神さまなので、例祭の晩には現在八組の献灯^{ななかり}、七柄の太太鼓の奉納があり、ていねいなお祭りとなっています。

ついでながら、第一章にも述べてあります通り、今の社地の地主の神である神明神社も御祭神は^{あまてらすおみかみ}天照大神さまで、皇室の御祖先、日本中の総親神さまとして崇^{あが}められている伊勢神宮を当地でお祀り^{まつ}する為に創建された、古いお宮です。同じ神様でも御神徳によつて、違^{ちが}う名で別々にお祀り^{まつ}していることになりました。



江戸時代末期田代神社古図

(二) 稲荷神社について

創立年月日は不明ですが、古くから田代神社の裏に鎮座されていました。享和三年（一八〇三）の記録に「稲荷大明神境内御除地」とあり、「除地」という言葉から江戸時代に租税を免除されていたことがわかります。又、箱のふたと思われる板に、「稲荷社安鎮之証書本宮愛染寺」と墨書してあるので、この稲荷さんの御本社が愛染寺にあり、そこからいただいた証明書が箱の中に入れてあったはずですが、残念ながらその証書は今見当りません。言い伝えによると、この稲荷さんは衣食住の守り神様で、明治初年（一八六八ごろ）には「天光様」（太陽の光の様にお恵みの光―ご利益―があらたかな意か）とあがめられ、大変お参りが多かったそうです。

明治の中頃（一八九〇ごろ）火事で神殿が焼け、そのころはお参りも少なくなっていたせいとか、それからずっと田代神社の拝殿に仮殿をしつらえてお参りしていたのです。その後、事情があつて、大正十二年（一九二三）に島田中井口組へ、金刀比羅神社（後述）と一緒に遷座され、有志の人々の尽力によりお祭りが続け

られていました。しかし、神様は島田へ行かれても、もとの境内地一二六坪は残っていて、天光様時代の名残りとどめています。そしてもともとこの稲荷さまは高田全体の守り神ですから、ぜひお帰り願いたいという気運が高まり、昭和十五年（一九四〇）ごろ、田代神社の南にお社殿を立ててお帰りいただくという計画が出来ました。その後色々な曲折を経て四十二年後の昭和五十七年（一九八二）二月二十七日に実現したのです。

(三) 金刀比羅神社について

創立について二つの説があります。

その一、「文化四年丁卯（一八〇七）、信者達が即心寺の境内に勧請（神様をお迎えして祀ること）した。」

（明治一〇年（一八七七）神社明細表）

その二、「文化十四年丁丑（一八一七）三月九日、洛花園萬猷霜戒という人が願主（神さまをお迎えしたいと願って、信者の代表として、その実現に尽力する人）となって即心寺の鎮守（守り神）として勧請した」（明治三〇年代後期（一九〇五ごろ）田代神社沿革記）この二説には十年の差がありますが、いずれにして

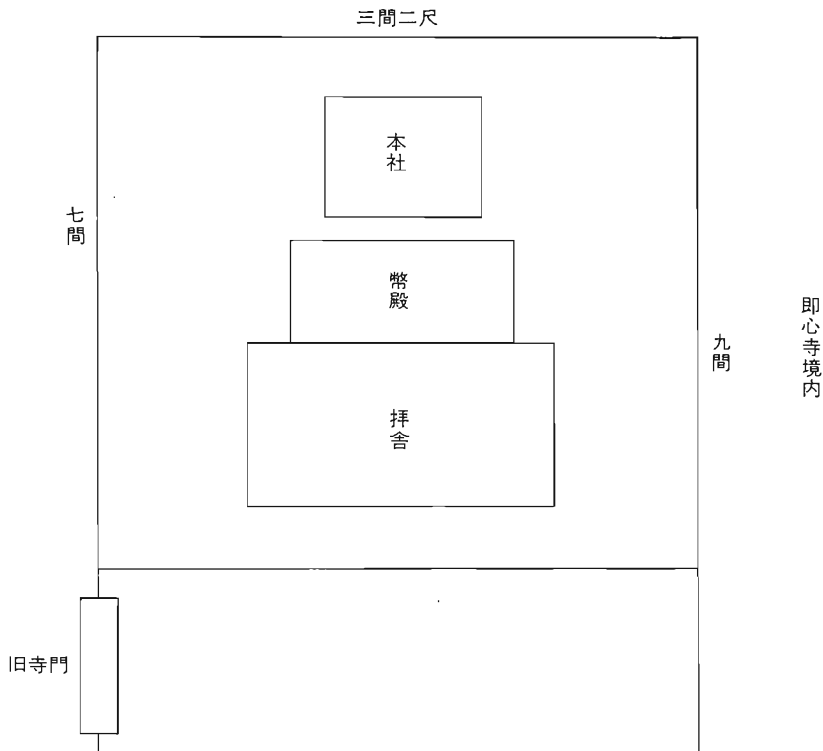
も文化年間に即心寺の境内にこんぴらさんが創立されたことは間違いありません。

そして天保一〇年（一八三九）と弘化三年（一九四六）年に護摩供養をさかんに行ったこと、又、天保五年甲午（一八三四）十一月十日と、嘉永三年庚戌（一八五〇）八月二十八日の二度、社殿を修理したことが記録に残っています。

明治維新の始め、神仏混淆が廃止された為、稻荷神社の境内へ末社として移転されましたが、明治二十四年（一八九一）十月二十八日の濃尾大地震の時、神殿、拝殿共に破壊した為、先年火災に遭った稻荷さんと一緒に田代神社の拝殿に仮安置されたのです。その後は前記の稻荷神社と同じ経過を辿り、更に昭和五十七年（一九八二）四月二十日、現在の地に社殿が出来て遷宮式が行われました。

ちなみに金刀比羅神社は香川県金刀比羅宮（讃岐のこんぴらさん）が本宮で、海上交通の守り神として有名です。又、福德を授ける神様としても靈驗あらたかというので、この高田の町でも創立以来昭和の中ごろまで、金刀比羅講という崇敬者の人たちが、毎年ていねいにお祭りを行って来たのです。

江戸時代末期の金刀比羅神社の配置図



三、明治維新以後

(一) 神仏分離



薬師如来

慶長八年（一六〇三）、徳川家康が將軍となつて以來、二六〇年余続いた江戸幕府が亡び、明治元年（一八六八）新政府が発足すると同時に神仏分離令（神仏を一緒にまつてはならないという命令）が出され、同四年（一八七二）、社僧をやめて神職専門の者を選ぶべしというお達しが出ました。そこで二七五年間続いた寿量院は廃寺となり、仏像経巻・仏具等を不破郡宮代村の大慈寺に納め薬師如来さまを隣の即心寺へお預けしました。田代神社・神明神社の宮寺として永年お守りして来た仏様なので、以來、氏子等は薬師講を結成し、毎年五月八日、即心寺で丁重に供養を営んで今日に至っています。又、最後の社僧であつた祐承

は還俗（僧をやめること）して井上丹吾と名を改め、しばらくこのお宮に奉仕していましたが、間もなく他の神社へ転勤しました。その後の神職は、柏淵静夫・井上丹吾（再任）・大橋芳樹・大橋直廣・大橋正廣という顔ぶれで一一四年（昭和六十二年現在）経過したわけです。

(二) 高田三百年祭など

明治三十五年（一九〇二）、「高田三百年祭」が行われました。先にお話した内容と重複しますが、その時の祝詞の一部をご紹介します。

「（前略）挂巻モ畏キ田代大神ヲ始メ奉リテ綜テ此町ニ鎮坐ス諸ノ大神等ヲ是ノ神籬ニ招奉リ坐奉リテ社司大橋芳樹恐自物膝折伏テ申給ハク 大神等ノ敷坐ス此高田ノ町ハ 昔慶長八年ト云ヒシ年 同ジ町ナル元町ト云ヘル処ノ人等水害ヲ避ケテ此処ニ移住ミシヨリ開ケ初メタル里ニシテ 当時ハ猶人ノ家居モマバラナリシガ 此処ハ遠近ノ郷々ヨリ人ノ集ルニ便リヨキ処ナリケレバ 農人ノ稼穡ヲ始メテ 商人工人ノ職々ニ至ルマデ年々ニ營ミ繁クナリ行キテ 人ノ家居モ多クナリ竈ノ烟モ立添ヒテ 今ハシモ 鄙ニ稀ナル饒ハシキ町

トハナレリ 如斯細石ノ巖トナルガ如ク塵土ノ山トナルガ如ク 弥益々ニ栄エ増ルヲ人々甚ク歡ビ嬉シミ今年ハ此町ノ開ケ初メシヨリ百年余リニ還リニ当レルガ故ニ 今ヲ言寿ギ将来ヲ祝フトシテ 此明治三十五年ト云フ年ノ四月廿三日ト云フ日ヲ吉月ノ吉日ト祝定メテ臨時ノ御祭厳ニ仕奉ル(後略)

明治四十五年(一九一二)七月二十五日「聖上陛下御不例につき、田代神社神前に於て、御平癒祈禱式執行」という記録が高田尋常高等小学校史の中にあり、児童たちの熱い祈願も空しく、明治天皇は同年七月三十日に崩御(お亡くなりになること)され、即日大正天皇が御踐祚(天皇の位をつがれること)になりました。

以下、年表式に社史をひもといてみます。

明治年間

40・9・24	例祭の直会……五目飯三升・酒四升・いもずるめ・鯉汁・のり・のりこんぶ・梨
41・4・3	牧田川渡橋式あり。余興として花火・散餅・競馬・自転車競争。
42・10・10	氏子総代改選。中村久次郎・柏渕東・中村源十郎・早野繁・佐藤丈太郎の五名当選。

大正年間

42・11・29	入営軍人奉告祭。伊藤健次(歩兵)近藤豊次郎(騎兵)
43・4・21	皇太子殿下、高田小学校へ行啓。
44・6・11	本殿屋根を柿葺からトタン葺に葺替。
1・9・23	大暴風雨のため本殿その他大破損。住民死傷あり、家屋の全半壊多数。例祭を9/27に延期。
4・11・10	大正天皇御即位礼が行われた。
8・3・20	社司宅に始めて電灯がつく。
9・9・26	大暴風雨。本殿その他大破損。
11・5・1	鳥居竣工奉告祭。川島福太郎氏の奉納。散餅・太鼓・献灯あり。
13・1・20	県道開通式。県内務部長・郡長・高田町外五ヶ村の有力者参列。
13・1・26	この県道は養老新道とも言われた。
13・4・12	東宮御結婚奉告祭。田代神社にて。この日、皇太子裕仁親王(今上天皇)と久邇宮良子女王とのご婚儀が皇居内賢所で挙行された。
13・5・21	高田愛宕神社社務所落成奉告祭。
	北堤公園(現在美津濃工場の敷地内)に建設された高田町忠魂碑の除幕式。この忠魂碑はその後移転し、現在西町燈明台の南にある。



大正時代、北河原において「どじょう踊り」

撰社神明神社の社殿が改築され、桑名から養老鉄道で送られて来た。この日の正午に高田駅へ到着、出迎えの総代、神事係等が大通りから田代神社まで新社殿を奉曳した。神明神社の社殿は従来八幡造りであったが、今回から神明造りとなった。

昭和年間

4・10・31	4・10・5	4・10・2	4・3・24	3・11・15	3・11・10	3・9・17	3・9・4
新しく城前町ができ、神事係は船見外三郎、田中兼吉となる。 神事係中より祭事年番を設けることとなる。(初年)下町・常盤町・城前町・下北浦(二年)中町・寺西・北横町・桜木町・榑町・西川原(三年)愛宕西・宮西・西町・南新道・寿町(四年)高南西・高南東・高北・下川原・川原町・御旅町(五年)井口・中井口・中組・朝日町・榑町・日出町。後に住吉町・蓮寺町ができて二年の組に加入した。 天皇陛下の御即位礼が京都御所で行われ、田代神社においても、当日祭を執行した。 右の御即位に伴う大嘗祭を全国神社で行われるにつき、田代神社においても、本日執行。高田町農会その他から新米・白酒・黒酒の奉納があり氏子七百四十余戸に紅白餅を配った。 田代神社境内の清掃に努めた児童五十七名を表彰した。引率、山口訓導。 伊勢の皇大神宮(内宮)の式年遷宮当日につき、遙拝式が行われた。 伊勢の豊受大神宮(外宮)の式年遷宮当日につき、遙拝式が行われた。 右の二日共、式場は高田小学校校庭。 蓮寺御神田菰取神事。町長始め奉耕関係者参列。							

四、歴代宮司の変遷

社僧から宮司迄 ― 歴代神職 ―

- 一、行透ぎょうとう 神明神社の社僧。現存する記録中最古の人。身分は法印（『法印大和尚位の略で僧侶の最高の位。転じて僧侶一般を指す』）。慶長元年（一五九六）宮寺として大善院を創建した。田代神社の神職をも兼務していたものと思われる。（以下の社僧も同様）
- 二、澄藝ちやうげい 法印、別当（神宮寺の僧職のこと）。慶長六年（一六〇二）、田代神社遷座の時、導師（儀式の長）をつとめた。
- 三、祐賢ゆうけん 延宝七年（一六七九）不動護摩供養。貞享四年（一六八七）と宝永四年（一七〇七）の二度、本殿修理。元禄二年（一六八九）と宝永五年（一七〇八）の二度、神明神社修理を行い、それぞれ遷宮導師をつとめた。元禄五年（一六九二）寿命院（元大善院）を寿量院と改称して首楞嚴院の末寺とした。
- 四、祐盛ゆうせい 享保十一年（一七二六）と延享三年（一七

四六）と明和五年（一七六八）の三回、本殿修復を行い、その遷宮導師をつとめた。又、明和三年（一七六六）神明神社の修理の際、導師となった。別当寿量院権大僧都祐盛法印と称した。

- 五、祐寿ゆうじゆ 寛政二年（一七九〇）本殿修復及び神明神社造替（つくりかえ）の遷宮導師、享和三年（一八〇三）神明神社修復（屋根葺きかえ）の遷宮導師となった。寿量院現住法印祐寿と称した。

- 六、祐順ゆうじゆん 文政三年（一八二〇）天保十三年（一八四二）の二回本殿修理の遷宮導師、文化十三年（一八一六）文政九年（一八二六）嘉永元年（一八四八）の三回、神明神社修復の遷宮導師をつとめた。寿量院法印祐順と称した。

- 七、祐承ゆうじやう 南宮社家伊藤左司馬の子。寿量院に入り当社の社僧となった。嘉永二年（一八四九）護摩供養をつとめ、元治二年（一八六五）稻荷神社修理、慶応三年（一八六七）本殿修復の遷宮導師となり、慶応四年（一八六八）地鎮の修法（産土神と大地の神に感謝を捧げ守護

を祈る)を行った。寿量院権大僧都法印祐承と称した。明治元年(一八六八)神仏分離の太政官・神祇官達(おふれ)により、還俗(僧をやめること)して井上丹吾と名乗り、小倉村八幡神社の社掌(今の宮司)となった。その後田代神社に復職し、他三神社を兼務した。明治十八年(一八八五)歿。

八、かしづみ 柏淵静夫 文化十年(一八一三)高田豪農好學の



家に生まれた。博學聰明で明治初年大垣藩校の教授、美濃国神職選定試験掛りに任ぜられた。明治六年(一八七三)

大垣八幡神社と島田村田代神社の祠官、同十二年南宮神社の祢宜となった。又、内務省より権大講義(教導職の階級)に補せられ、岐阜県下神道事務分局副長、第四大区五の小区神道事務支局長等の要職を歴任した。文学、神典に通じ、門人数百人に及んだ。明治二十五年(一八九二)歿。

九、ほうじゆ 大橋芳樹 天保三年(一八三二)江戸小石川小原町、秋元正直の長男として生まれた。若くして俳



諧、和歌、書道を修め、子弟に読書習字を教えた。元治元年(一八六四)中条信礼を師として国学を深く修めた。明治維新の混乱により一家離散、

諸国を流浪する中、ふとした縁から高畑村戸長(今の村長)大橋博三郎の養子となり、後に高田へ移住した。明治六年(一八七三)橋爪日新義校他三校の巡廻教師に任ぜられた。

同年南宮神社において教導職試補(神道教師)を拝命、以後多岐神社他三社の祠官をつとめ、明治十三年南宮神社祢宜、明治十九年田代神社祠官となった。その後も近村の各神社多数の神官を兼務し、更に内務省より権中講義に補せられ、皇典講究所委員、岐阜県下岐阜神道事務局分局副長、全国神職神官連合大会議員その他数々の要職を歴任した。明治三十八年(一九〇五)歿。

十、かしづみ 柏淵 需

明治十二年(一八七九)高田に生まれた。祖父は柏淵静夫。師と仰いだ大橋芳樹歿後、そ



の嗣（あとつぎ）直廣を助けて終生田代神社に奉仕した。国学、和歌にすぐれ、交際が広がった。高田区長、農業会長、神徳会養老郡支部副会長、

十一、大橋直廣

年（一九四七）歿。



明治二十三年（一八九〇）芳樹の長男として生まれた。父の死後直ちに十四歳で、田代神社の出仕・小学校の代用教員となり一家の生計を支え、

柏淵需らの助言を受けつつ独学で神職・教員の免許を取った。田代神社の奉仕六十年間、厳正なる祭式、多数の宮繕事業を行い、死の直前迄書き続けた六十三巻の日誌に詳細な記録を残した。在任中昭和六年（一九三一）の本殿以下の大修理、昭和十二年（一九三七）の氏子集会所新築を出発点とする御造営計画の推進等は後世に大きな影響を与えた。氏子

の敬慕も厚く、兼務神社五十五社あり、県神徳会理事をつとめ、戦後は岐阜県神社庁養老郡支部長となった。昭和二十年従七位、昭和四十年神職身分一級浄階の待遇を受けた。昭和四十年（一九六五）歿。

十二、大橋芳廣



大正十年（一九二一）直廣の長男として生まれた。成人して田代神社社掌（今の祢宜）に任ぜられたが、昭和十七年（一九四二）二十歳で戦陣に

十三、大橋正廣

歿した。



昭和二年（一九二七）直廣の二男として生まれた。昭和十二年田代神社祢宜、同四十年同神社宮司となり、現在勤務中。兼務神社五十八社の宮

司、神宮評議員、岐阜県神社庁理事、同庁祭祀舞講師、同庁教学委員長、同庁養老郡支部長、神社本庁岐阜県地方研修所講師等の役職

を歴任。昭和六十一年（一九八六）昭和の大御造営竣工による本殿遷座祭の斎主を奉仕した。

十四、大橋利子^{としこ}

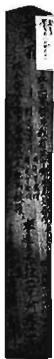


岐阜市池ノ上町の神職後藤森一（戦後金神社宮司）の二女として生まれた。昭和二十六年から四年間、岐阜県神社庁の録事を勤めた。昭和三十年、

田代神社祢宜大橋正廣と結婚。同三十一年同神社権祢宜、昭和四十年祢宜^{ねぎ}に任ぜられ、今日に至る。又、岐阜県神社庁養老郡支部事務主任も勤続中。

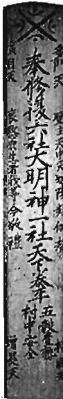
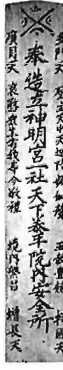
五、棟札（むなふだ）

棟札とは、棟上^{むねあげ}のとき、工事の由緒、建築年月、建築者（又は工匠）の名を記して、棟木^{むなぎ}に打ち付ける札のことです。これにより、神社の修理や建て替えの経緯を知ることができ、史料価値の高いものです。

		
承応二年（一六五三） 社頭再造	寛永十八年（一六四一） 十二月十九日 本殿造立	慶長六年（一六〇一） 十二月二十六日 社地移転 本殿造立

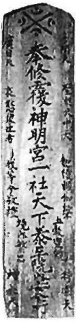
				
宝永四年（一七〇七） 本殿修理	延宝七年（一六七九） 不動明王の護摩供養 ^{ごまぐよう}	元禄二年（一六八九） 神明神社修理	貞享四年（一六八七） 本殿修理	寛文一〇年（一六七〇） 太代社造立 ※本殿建替の意。この年 以来、建替への記録なし

				
本殿修理 明和五年（一七六八）	神明神社修理 明和三年（一七六六）	本殿修理 延享三年（一七四六）	享保十一年（一七二六） 本殿修理 「正一位」の文字初見「正一位太代大明神社」とあり	宝永五年（一七〇八） 神明神社修理

	
寛政二年（一七九〇） 本殿修理	寛政二年（一七九〇） 神明神社建て替え

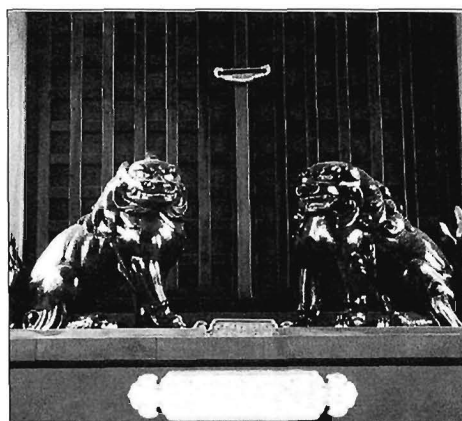
文化十一年（一八一四）三月二十八日に田代神社の御遷宮式があつて高田の町が賑やかでした。ところが翌二十九日、専念寺が原因不明の火災で九間四面の御堂が全焼しました。その後再建された同寺本堂の棟木が田代神社境内の大松であつたといひます。この松を当時の人々は「徳永松」と呼んでいたそうです。

（右記を表わす棟札不明）

				
天保五年（一八三四） 神明神社修理（屋根）	文政一三年（一八三〇） 本殿修理	文政九年（一八二六） 神明神社修理	文化一三年（一八二六） 神明神社修理	享和三年（一八〇三） 神明神社修理

				
嘉永元年（一八四八） 神明神社修理	弘化三年（一八四六） 護摩供養	天保一三年（一八四二） 本殿修理	天保一一年（一八四〇） 神明神社修理	天保一〇年（一八三九） 金刀比羅神社護摩供養

				
本殿修理 明治八年（一八七五）	地鎮を修す 慶応四年（一八六八）	本殿修理 慶応三年（一八六七）	稲荷神社修理 元治二年（一八六五）	護摩供養 嘉永二年（一八四九）



六、宝物（一）

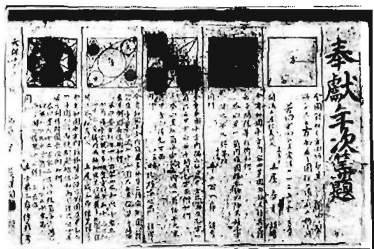
「狛犬」
木製
高頭より足迄一尺三寸
横鼻より尾迄一尺四寸
五分 一対

「円鏡」
裏面
正一位太代大明神
径 一尺 一面

	
「短刃」 上、銘不明 刃長六寸 享保二十一年奉納 (一七三六) 下、銘兼吉 刃長八寸	「備前長船」 永徳三年 (一三八三)

	
「夫婦鶴」 天保七丙申初春吉辰 (一八三六) 雀嶺画	「馬と龍」 享保六年五月 (一七二二)

七、宝物 (二)



「算額」
奉獻年次算題
天保十二年辛巳八月
(一八四一)
※卷末資料一二三へー
シ参照

「諸色高直」
天保八丁酉年
(一八三七)



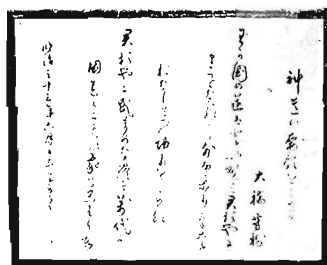
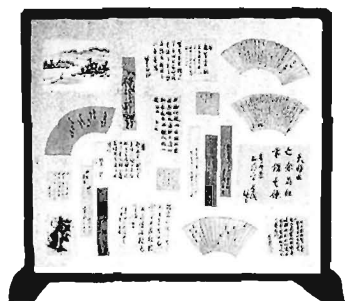
「黒馬」
奉納
天保十四癸卯年卯月天
赦日写義信
(一八四三)

「母乳授」或曰「山姥」
奉懸御宝前
文政十一年戊子首夏日
(一八二八)
※卷末資料一一五へー
シ参照



「文字額」
和 順
池菴佐玄龍書

「騎馬武者」一人
奉掛御寶前
明和元年甲申臘月中浣
(二七六四)

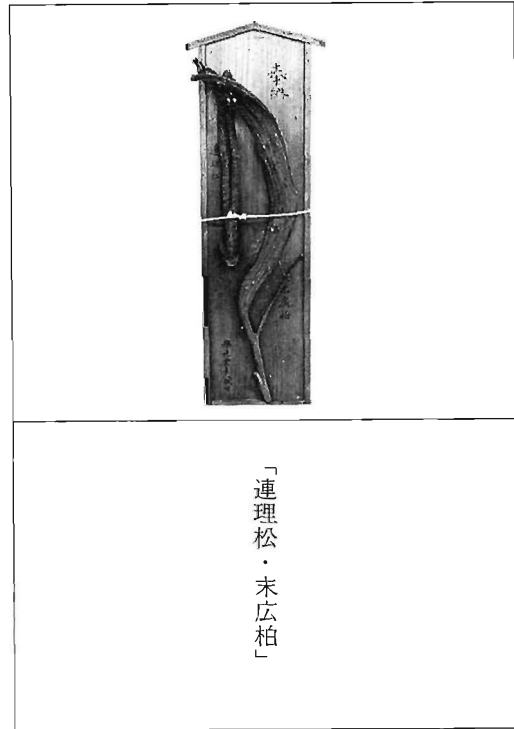


「郷土文化人の遺墨」
衛立(ついでて)

「神道の要領を詠める
(他一首)」
大橋芳樹
歌「わが国の道はと
いへば君おやに
まことなるより
外なかりけり」
明治三十三年六月十三
日(一九〇〇)

八、境内工作物

一、明神鳥居	大正十一年建立
二、稻荷鳥居	昭和五十七年建立
三、神明鳥居	昭和六十一年建立
四、狛犬(一)	天保四年設置
五、狛犬(二)	昭和十一年設置
六、狛犬(三)	昭和六十年設置



七、神狐	昭和五十八年設置
八、内玉垣	昭和五十九年建設
九、中玉垣	昭和六十年建設
十、外玉垣(一)	昭和三十年建設
十一、外玉垣(二)	昭和六十一年建設
十二、社号標	明治二十五年建設
十三、石燈籠(一)	寛政五年設置
十四、石燈籠(二)	昭和二年設置
十五、石燈籠(三)	昭和六十年設置
十六、燈明(田代神社)	昭和六十年設置
十七、燈明(神明神社)	昭和六十年設置
十八、燈明(稻荷神社)	昭和六十年設置
十九、燈明(金刀比羅神社)	昭和六十年設置
二十、境内配置図(提示板)	昭和五十七年設置
二十一、昭和遷宮記念碑	昭和六十二年設置



二股で子供達に親しまれている木

一、楠
(北東)

九、境内樹



昭和遷宮記念碑

- 四、松 (北東)
- 五、松 (西)
- 六、杉 (社号標後)
- 七、青桐 (南東)
- 八、榎 (どんぐり) (西)



天皇皇后両陛下下行幸啓記念樹
昭和40年10月26日

- 二、楠 (北中)
- 三、楠 (社務所西南)

十、太鼓組・献燈組

太鼓組

島田中組・島田井口組・下高田北組（高北）・下高田南組（高南東・高南西）・協進町下北浦・永和町二班（旧名西川原）・東洋町西

右七組七柄

献燈組

太鼓組七組と下川原町併せて八組
右の太鼓及び献燈組の奉納は年四回

（昭和六十二年現在）



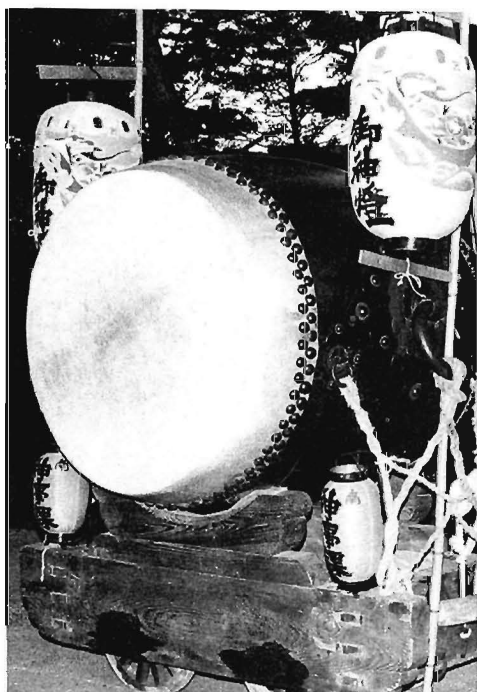
例祭夜景
昭和17年9月24日



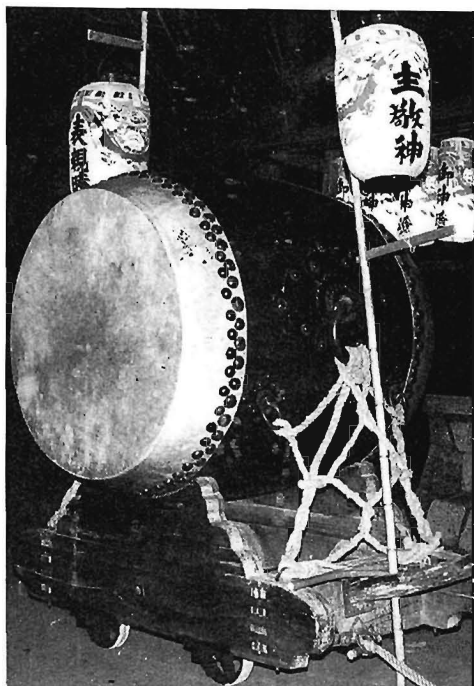
島田井口組



島田中組



高南組



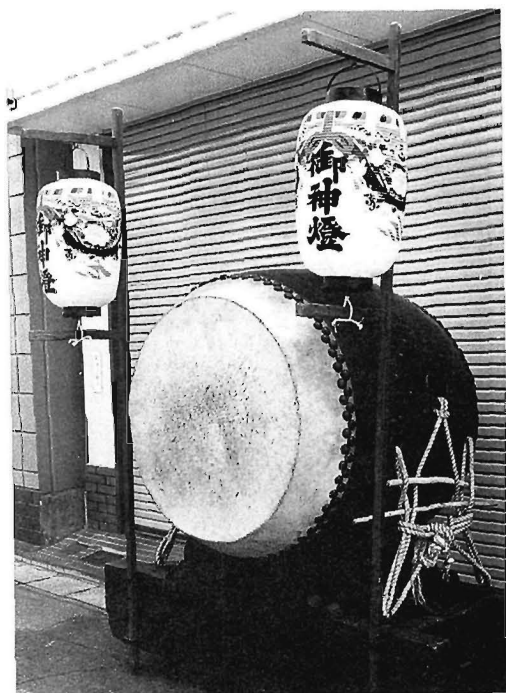
高北組



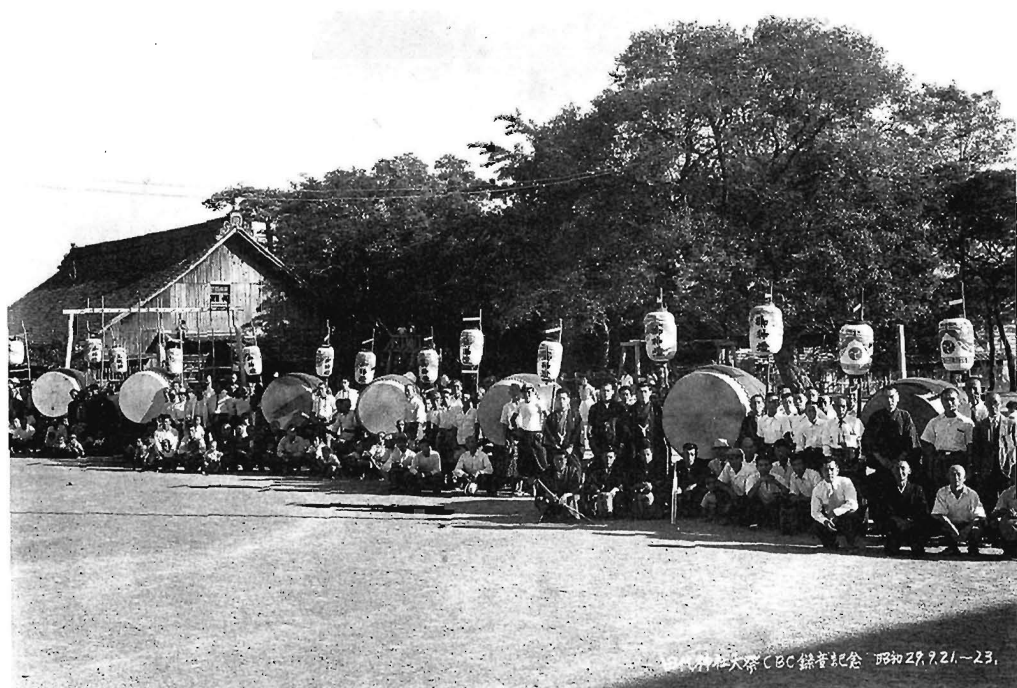
西川原組



下北浦組



東洋町西組



田代神社大祭(C B C 録音記念)昭和29年9月21日～23日

太鼓組 献燈組 打合わせ事項

昭和61年 8 月18日

田代神社宮司 大橋正廣

田代神社総代会

1 太鼓奉納 月 日

御鋤祭り 8 月20日

大祭 試楽 9 月22日

本楽 9 月23日

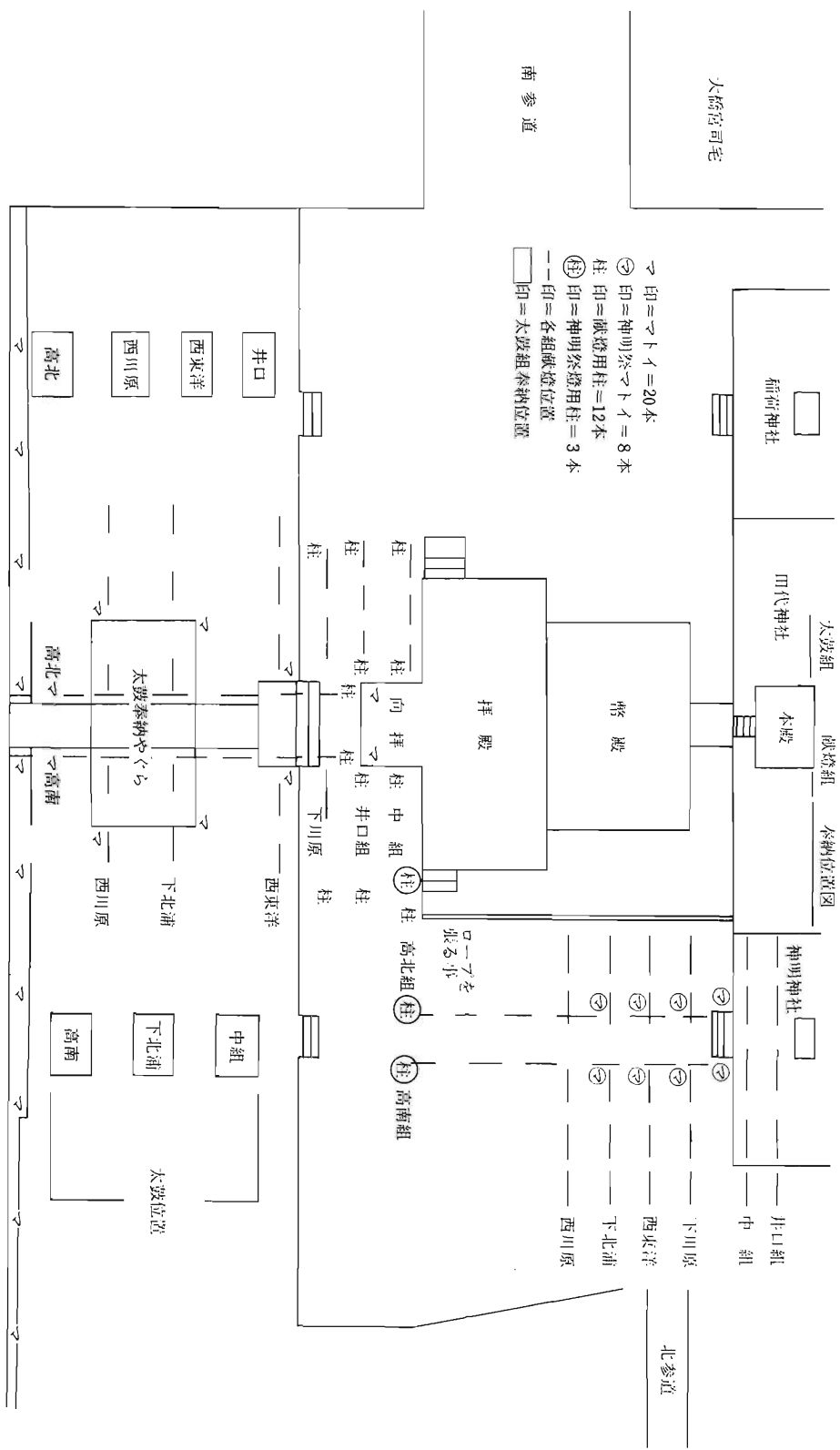
(特例も有り)

神明祭り 10月 1 日

(注 年番長＝太鼓組年番長とする。)

- 2 太鼓集合場所 時間 年番長が直会の場で相談をして決める。(大門何時集合)
- 3 太鼓集合場所に於いて総代及び神事係りは挨拶をすること。
挨拶が終わったら年番長は時間が来たら出発し田代神社に入社する。
- 4 太鼓の入社 1 下高田 出社 1 島田
- 5 太鼓の入社の時 宮司と年番長は集会所付近で挨拶する。
- 6 献燈 太鼓組が境内に入ったら年番長拝殿右神事係りを集合させ、献燈合図し献燈をする。
- 7 消灯も上記に同じ。
- 8 提燈が片づいたら太鼓組は島田からすみやかに境内をでる。
- 9 宮司挨拶は 5 番と同じとする。
- 10 献燈位置は別紙図面通りとする。
- 11 その他。
太鼓奉納日には太鼓組は七組そろって奉納する事。

太鼓並に献燈配置図



十一、どじょう踊り（養老町無形文化財）

起源不詳。徳川時代の領主によって奨励され「土壌」の意味と推測される。

「豊年踊り」ともいう。土に根ざし生産を祈りゆたかな稔りを感じて感謝する心で行われている。

例祭に奉納。櫓上^{やぐら}に太鼓二柄^{ふたから}をあげその周囲で円陣をなして踊る。六十一年例祭には櫓上の太鼓以外の五柄も向拝左右に並んで七柄の揃い打ちでどじょう踊りを実施した。

（打法） 参進・退社るとき、境内での揃い打ち、踊りと、その前後においてそれぞれ独特の打法がある。

（民謡の一部）

松坂越えて今出たね（サーヨーヤートヤー）
何から言おやら申そやら（サーヨーヤートヤー）
今年しや豊年万作で（サーヨーヤートヤー）
どこからどこまで米だらけ

（サーヨーヤートヤー、ヨーヤートセー）

—— 以下雑言葉省略

わたしや備前の奥山育ち

金のなる木は まだ知らぬ

今年しや豊年穂に穂が咲いて
道の^{おぐさ}小草にも米が生る

三国一の出世の鑑^{かがみ}
幼^{おきな}育ちの物語^{ものがたり}

小僧に入りて三之助^{さんのおすけ}

草刈り奉公いたされた
出船^{でふね}入船^{いふね}帆掛け船^{ほかけふね}

帆掛けて走るその中に
仏^{はと}が三体おわします

鈴木主水^{しんと}という侍^{さむらい}は

女房^{ふたり}を持ち子が二人

見るに見かねて女房のおやす

ある日わが殿主水に申さく

やめておくれよ女郎買^{おんなかひ}いばかり

せめてこの子が三つになれば

伊勢のとやくの銭掛け^{ぜにか}松は

松は枯れても名が残る



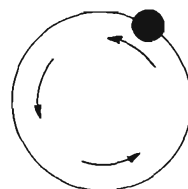
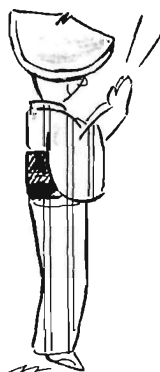
田代神社例祭奉納

どじょう踊り

図解

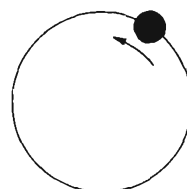
1

中央向き



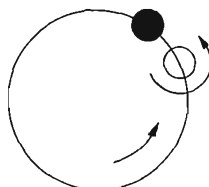
2

右向き



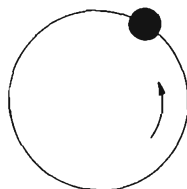
3

左回り
一八〇度回転



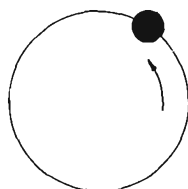
4

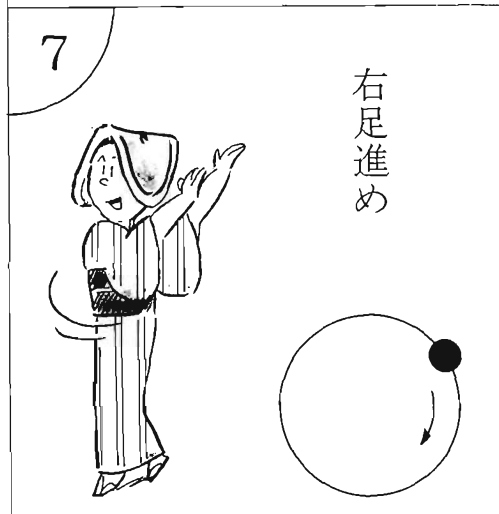
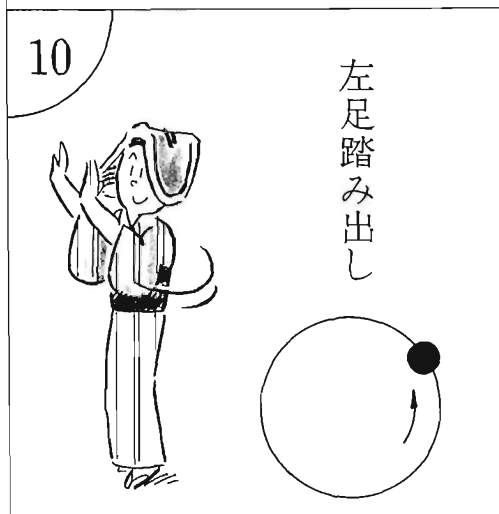
左足引き



5

右足引き





以上をくりかえす

第三章 御造営奉賛会のあゆみ

昭和遷宮の完遂

一、昭和五年度の御営繕ごえいぜんについて

明治八年（一八七五）の本殿修理以後、五十五年間の中に、社殿などが大変痛んだので、昭和五年大修理と整備（御営繕）が行われた。氏子の浄財一六六七円二十二銭で工事及び神事その他の費用をまかになった。

当時酒一升が八十五銭だったから、昭和六十二年現在の値段は約二二〇〇倍になっている。また、大工さんの日当は一円八十銭だったので現在は七千乃至一万倍位になっているであろう。つまり、当時の一六六七円は、今の一千五百万円位に当たると思われる。

工事の内容としては、特に本殿の出来ばえがすばらしく、新築同様になった。拝殿幣殿もしっかりと修理が出来、建具・畳などは殆ど新品になり、また、今まで無かった神庫が新築された。特志者六十数名による

神具その他の奉納も多く、神様の御衣・ボンボリ・拝殿の幕・御簾・御帳などが続々と新調されていた。

八月中旬に起工、十二月下旬に竣工、翌昭和六年三月二十六日に御営繕竣功奉告祭が執行された。奉納余興として煙火・撒餅・獅子芝居・生花会等がもよおされ、全氏子に神酒・紅白餅がくばられた。

二、苦節五十年の開花

昭和十一年ごろから、田代神社の飛躍的な御造営を望む声が高まり、先ず昭和十二年に氏子集会所を新築して、事業推進の拠点とした。次いで昭和十六年、田代神社御造営奉賛会を結成、募金活動を開始した。当時は戦争が拡大の一途をたどり、造営事業も次第に困難となり、昭和二十年、わが国の敗戦という冷厳な事実の前に、遂に希望の曙光も失われたかに見えた。

しかし、氏子の敬神の念は不動であった。激動の社会をたくましく生き抜き、祭典は一度も中止すること

なく厳修^{げんしゅう}し、古い社殿等の修理と平行して、造営計画にもとづく玉垣手水舎等の新築を行って、機運の熟するのを待った。

神徳あらたかに、遂に多年の念願成就^{じょうじゆ}のときは来た。昭和五十七年、神殿全体の新敷地造成、境内神社三社と神庫の造営が完成した。その後四年を経て、昭和六十一年に、田代神社本殿以下ほぼすべての造営工事が竣工、一千戸余の氏子を始め全国各地の崇敬者多数奉賛の結実を見たのである。

この章では、五十余年にわたる田代神社御造営の歴史をひもとき、先人の遺志を継ぐ私たちが昭和の御代^{みよ}に完成させていただいた喜びを共にかみしめたいと思う。

(一) 終戦まで

昭和十一年九月二十八日、神事係代表川島福三郎・谷口朝次郎・川瀬徳正の三氏が大橋社司（当時は宮司のことを社司と言った）に次の申入れを行った。

「神事係一同協議の結果

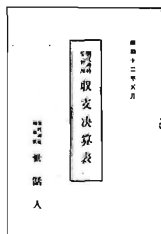
一、御造営を速かに計画されんことを要望する。

二、社前の空地に集会所を建設されたい。」

これを受けて、社司は十月十四日氏子総代会を招集、前記の申入れを伝え、協議の結果取り敢えず集会所建設を受納することに決した。ここに受納というのは、先日の申入れの中に、この集会所建設は神事係が主体となつて進めさせていただきたいという希望があつたので、それではお受けするという表現になつたもの。

昭和十二年五月十四日午前十時、田代神社氏子集会所の竣工奉告祭が執行された。この集会所は神事係が發起^{はつき}し、総氏子の寄附金を以て新築されたもので、木造瓦葺^{どうかわらぶき}平家建て^{ひらかたて}で延面積十五坪（五一㎡）であつた。

従来、田代神社には社務所が無く、大橋社司の住宅で氏子総代会が開催されていた。但し八畳の座敷では、神事係との合同会議場にはとても無理だったのが、この集会所の建設によつて解決し、御造営の第一歩となつた。



上の決算表から参考になるデータを再録してみよう。

支出の部

一、建築費	六四四円八八銭
二、諸経費	四七円八一銭
合計	六九二円六九銭

収入の部

桜木町	一〇円	蓮寺町	八円五〇銭
相生町	七円	下北浦	一五円五〇銭
南新道	二二円	中町	五五円
河原町	七円	榎町	八円〇五銭
城前町南	一六円八〇銭	住吉町	一一円
城前町北	四円七〇銭	東町	四五円
常盤町	二六円	下河原	一五円
榊町	六円	日出町	一五円二〇銭
宮西町	九円六五銭	寺西町	八円七〇銭
末広町	二円	北町	一八円
島田井口組	三〇円五〇銭	朝日町	二三円
寿町	七円	下高田	四五円
愛宕西町	一八円五〇銭	西町	七二円五〇銭
西河原町	一八円	宮町	八円三〇銭
島田中組	二二円〇四銭	門前町	一六円四〇銭
右三十ヶ町氏子合計	五七一円三四銭		

氏子総代一同 五〇円

特志者一八名他 一〇五円〇六銭
収入合計 七二六円四〇銭

昭和十五年十二月二十六日。晴後曇、静か。田代神社御造営奉賛会結成奉告祭が、佐藤一郎会長以下七十七名参列のもとに挙行された。

役員は左の通り。但し一部変更もあった。

会長 佐藤一郎(当時の高田町長)

副会長 中村準一 渋谷有内

顧問 柏渕 需 佐竹直太郎

評議員代表 川瀬清吉 外氏子総代・神事係 町会

議員・町内会部落会正副会長

実行委員 代表野村見二 外数十名

会計 高田信用組合長小足敏夫

監事 千秋高致 日比野恭四郎

田中勘六

書記 谷口義一 野村文二 村田房吉

昭和十六年三月七日の御造営会議において工事とその予算の概要が起案された。

本殿 二間 九尺 流造 ながれづくり (三坪)	五万円
幣殿 二間半 (五坪)	二千元
内拝殿 三間 ないはいでん (九坪)	三万円
土間拝殿 三間半 九間半 (三一・五坪)	
神饌所 二間 九尺 (三坪)	千円
手水舎 二間 (六坪)	千円
社務所 六間 九間 (五十四坪)	一万三千五百円
神庫 二間半 (五坪)	三千円
社宅 四間 五間 (二十坪)	五千円
雜庫 三間 四間 (十二坪)	千二百円
神明社 六尺 五尺 (〇・八三坪)	五千円
稻荷社 四尺 三尺 (〇・三三坪)	三千円
本社透塀延十八間	五千四百円
神明社板垣 延十四間半 御門付	二千円
稻荷社板垣 延十二間 赤鳥居付	六百円
制札	五百円
石鳥居 径二尺	四千元
境内地上六百坪の土砂	四千五百円
境内周圍石積 高五尺 百三十間	三千円
本殿 始め各建物 制札 等の石垣・石材	一万円

境内周圍 の前と左右石玉垣高さ五尺百間 後土塀三十間	一万円
石橋・正門・側門	二千元
諸経費・民家立退料	三千円
	二万円
合 計	十八万一千七百元

(社務所より拝殿に通ずる地下道は予算外)

この壮大な御造営計画は様々な論議を呼んだ。しかし基本的には大方の同意が得られたので、予算十八万円の中、十万円を氏子で、八万円を元氏子(他所崇敬者)より募集することとした。又、強制することなく、五ヶ年計画で完納という目標を立てたのである。

——以下年号略、すべて昭和——

十六年六月十二日、寄附額決定第一号は元町で、三千二十三円、五十人分が記帳された。これに先立ち、役員も二千円、千五百円、千円と高額の記帳で率先し、追々各町内氏子も記帳が進んだ。

同年十二月八日、わが国は米英と戦闘状態に入り、大東亜戦争(いわゆる太平洋戦争)が勃発した。緒戦しよせんの華々しい戦果に国民はわき立ったが、やがて戦局は

次第に不利となり若者は次々に出征^{しゅっせい}し、物資不足が深刻になって行つた。その間にあつても募金活動は続けられ、十八年三月現在、記帳された金額合計八一、二七五円五〇銭で、実際に入金した額は一八、九六五円二銭となつた。

十九年十二月六日、猛烈な地震が起きた。拝殿、幣殿が傾き、石燈明が四ヶ倒れ、鳥居の額も落ちた。そして翌二十年八月十五日、遂に敗戦の日を迎えたのである。食糧品を始め諸物資の欠乏の中で戦後の復興が進められたが、当社としても御造営に直ちに取り掛かれる状態ではなく、地震等による被害の応急処置が急務であつた。

(二) 戦後の復興

二十二年十月三十日、田代神社奉賛会更始一新奉告祭が執行された。辞任した佐藤会長の後任として中村準一会長が選任され、新会長司会のもとに、各所修理等を奉賛会が行うことになった。その応急処置と平行して、御造営工事としての南側境内拡張と高塀の改築が進められ、二十四年五月二十四日竣工奉告祭を執行するに至つた。同年九月から正面格子高塀の基礎石垣

の築造工事開始。この石垣は完成したが、高塀再建は実現しなかつた。

敗戦後六年間、大御造営の夢はかなわず、小規模な工事に明け暮れたが、祭祀^{さいし}の執行、日々の参詣^{さんけい}は着実に行われ、その為の社頭の整備であつた。二十六年九月、中村会長以下奉賛会幹部役員らが辞任の意を表明、二十八年には資金もほとんど無くなり、加えて戦後のインフレの進行は造営予算額十八万円を二十分の一の価値しかないものに押し下げてしまつた。そこで奉賛会は一応解散して機を待つこととし、二十九年以後は別途の方法で建物等の維持運営をすることとなつた。つまり工事費等は神社の積立金やその都度募集する寄附金でまかなうこととしたのである。

その後の主な事業は次の通り。(数字は総経費)

- | | | |
|----------|--------------|-------------|
| (1) 二十九年 | 神明神社屋根葺替 | (三八、〇〇〇円) |
| (2) 三十年 | 幣殿、神庫、集会所等修理 | (一七七、〇〇〇円) |
| (3) 三十四年 | 外玉垣(正面と北)新設 | (七二〇、〇〇〇円) |
| (4) 三十六年 | 手水舎新築 | (一二五〇、〇〇〇円) |
| (5) 三十九年 | 高塀増築、ブロック塀新築 | |

(四五八、〇〇〇円)

(6)三十九年 本殿幣殿楽人席屋根葺替

(二〇〇、〇〇〇円)

(7)四十一年 社務所修理改装 (一、〇〇五、〇〇〇円)

(8)四十二年 社務所屋根葺替 (一、三〇〇、〇〇〇円)

(三) 御造営日誌

(イ) 第一期事業

昭和五十三年

11月12日	七五三の後、氏子総代会。境内西及び北西の境界にフェンス(又は適当な柵)を新設の件。理由：隣地に養老幼稚園が開園されるに伴う措置。この機会に御造営の本格的な計画立案に取組むこととなり、御造営準備委員会委員長に川瀬善一氏を選出。
11月18日	神宮大麻頒布式の後、御造営準備委員会開催。
11月21日	川瀬委員長・早崎・柏淵委員等来社。境界整備につき、養老町当局も了承。
12月6日	神社・町当局立会いで境界杭確認。
12月15日	川瀬委員長・早崎委員来社。養老町に申入れる土地の等価交換図面を持参。

昭和五十四年

1月10日	御造営準備委員会開催。
1月20日	御造営準備委員会一行、岐阜市長良天神神社・金神社を視察。
1月27日	御造営準備委員会。設計案の作製を大垣市の児玉建設に依頼する事に決定。
2月17日	祈年祭の直会の時、御造営計画につき、熱心な意見交換がなされた。
3月20日	川瀬委員長、病気の為辞任届。
7月23日	宮司、早崎委員宅で「社地の改正覚書」に調印。
9月8日	新旧氏子総代会合同会議。御造営準備委員会は新旧氏子総代全員が委員となることを確認。
12月27日	児玉建設の設計図(案)が出来た。

昭和五十五年

1月13日	御造営準備委員会。松園で初会議。
9月2日	氏子総代会。御造営の推進を申し合せ。
12月28日	川瀬委員長、再び辞表提出。

昭和五十六年

4月11日	神庫取壊し終了(中村土建)。
-------	----------------

9月26日	御造営準備委員会。川瀬委員長辞任により、早崎肇氏を新委員長に選出。「稻荷神社の復興は明年初午（二月二十八日）実現を初望する」と、宮司より懇請あり。
11月23日	新嘗祭の直会の席上「明年初午、稻荷神社の復興実現」を目指し、「今日がスタート」と早崎委員長の発言。
11月27日	神明神社・稻荷神社御造営委員会（委員長：早崎肇氏）が決定。
12月5日	神宮大麻頒布式の後、「（田代神社御造営第一期事業）神明神社造替並に稻荷神社再興趣意書」を氏子全戸に配布する様、神事係に依頼。
12月11日	御造営着工奉告祭。
12月12日	境内後部ブロック塀取壊し（藤一建設）。終日盛土のダンプ往来し、夜に至る。家鳴り震動す。
12月14日	業者に対する現場説明会。
12月18日	入札。請負業者決定。
12月20日	工事安全祈願祭執行。
12月21日	樹木移植、基礎工事開始（藤一建設）。
12月28日	記帳札・工事表示看板立つ。

昭和五十七年

1月6日	新年初工事。
1月11日	石工事開始。
2月11日	定礎祭執行。
2月18日	本殿新敷地に檜瑞垣建設（桐山建設工業）。

2月23日	新本殿予定地に標柱建立（平井建設）。
2月24日	神明神社・稻荷神社の新社殿搬入。稻荷鳥居立柱祭。（富田神具店・宮戸建築）
2月25日	神明神社本殿遷座祭執行。
2月26日	神明神社の旧本殿を撤去。
2月27日	稻荷神社本殿遷座祭執行。
2月28日	神明神社・稻荷神社御遷宮大祭執行。
4月17日	金刀比羅神社再建の地鎮祭執行。（富田神具店）
5月10日	神庫再建の地鎮祭執行。（久保寺商店）
5月13日	境内地と町有地との境杭を打つ。金刀比羅神社の石積み工事、神庫の基礎工事開始。
5月27日	金刀比羅神社本殿遷座祭執行。
5月30日	金刀比羅神社御遷宮奉祝祭及び神庫上棟祭執行。
	新社殿等の目録献呈式執行。
	本日を以て御造営委員会を解散し、再び御造営準備委員会に戻る。
6月4日	神庫東の土盛り整地工事。
7月13日	神庫の竣工検査を実施。
7月15日	神庫竣工奉告祭執行。

昭和五十八年

7月17日	稻荷神社に御神狐奉納の申出あり。
7月30日	御神狐奉納趣意書を配布。奉納者一一九名に達す。
8月11日	嶺田石材本店に御神狐一対を発注。
9月9日	御神狐建前。
9月22日	御神狐奉献祭執行。

(二) 第二期事業

昭和五十九年

4月1日	田代神社御造営奉賛会結成奉告祭執行。
4月5日	会長山田良造氏より各役員に委嘱状を渡す。
6月23日	第一回常任理事会開催。
7月1日	評議員会開催。事業計画並びに予算一億二千万円を承認。
8月12日	雑工事起工奉告祭執行。
8月25日	顧問参与会開催。
8月28日	入札により施工業者を株式会社仲間組と決定。
9月5日	同日、本殿屋根の銅板寄進受け開始。
9月6日	仮殿内陣の御扉新設。(富田神具店)
9月11日	仮殿拝所増設。(大仁建設)
9月27日	新御樋代を奉製、仮殿に安置。(富田神具店)
10月21日	本工事起工奉告祭執行。
10月25日	晴涼、夜八時、仮殿遷座祭執行。かがり火映える。
10月26日	日本殿・幣殿・拝殿の解体撤去終了。
12月14日	本工事地鎮祭執行。
12月30日	新本殿台座石垣工事完成。(松井石材)
	境内西端の石垣(玉垣の基礎)二段積み終了。
	奉賛金の記帳約八割終了。

昭和六十年

4月5日	本殿・渡殿・幣殿・拝殿の基礎工事並びに内玉垣完成。(藤一建設・松井石材)
4月28日	定礎祭執行。
6月19日	(雨一時曇)
7月4日	校門前の水路改設工事開始。(養老町)
7月8日	(雨一時曇)
7月16日	校門東水路工事。
7月23日	稲荷道拡幅工事。ブロック塀片づく。
7月26日	(曇一時俄雨後晴)
7月27日	古屋壊し概ね片づく。
8月2日	(晴)
8月11日	幣殿・拝殿床下基礎工事。
8月17日	(朝、曇後晴、夜、一時小雨)
8月22日	神庫の北の石積み二段。
	(晴)
	校門前石積み。
	(晴、夜、小雨)
	社務所南側溝と旧長石を移動。
	(晴)
	宮司宅付近の側溝仕上げと東正面石段予定地脇の基礎コンクリート打ち。
	(曇一時雨)
	南参道ブロック塀工事進行。
	(晴)
	南参道、ブロック塀の仕上げ。
	(曇後晴)
	北・西石積みの上に土台を据え付ける。

8月30日	(曇一時どしゃ降り 台風13号日本海を東北進晴れ間あり)
9月9日	石屋、正面石積み。黒御影。 (晴)
9月10日	正面石段付近終了。本殿前石段も終わる。 (曇後晴)
9月15日	石屋 正面石張りその他の仕上げ。 (晴後曇一時小雨)
9月18日	新本殿、着、午前4時45分。修祓式5時50分。明けの明星輝く。 (曇時々小雨)
9月30日	本殿の御鞘ができた。 (晴)
10月6日	石玉垣の移設終了。 6時45分、奏樂と共に神柱二本到着。 立柱の儀。参列者一同、奉祝ワッペンを付け礼装にて。
10月10日	(晴 暖か)
10月20日	高堀の板壁に黒塗料を塗る。完成。 (晴後曇 冷える)
10月22日	石玉垣奉献の正式に受付を始める。 (曇後晴 無風)
10月29日	午後 富田氏他一名、本殿屋根下地完成。 (曇後雨)
11月9日	本殿、棟を残し銅板葺き終る。 (快晴 暖か、やや風)
	大工二名、幣殿拝殿の土台仕上げ。

11月12日	(晴一時時雨)
11月14日	犬走コンクリート打ち、鉄筋入り。 (秋空高し 晴微かに雨)
11月15日	拝殿建て方始まり。柱、概ね建つ。 (晴時々曇、時雨 風寒し)
11月18日	幣殿の柱、大略建つ。 (晴 夜、少し時雨)
11月19日	本殿金具、隈無く打ち終わり、絢爛豪華。 (晴一時時雨)
11月20日	棟木、町内巡行。(12時20分より12時50分まで) 修祓後、幣殿へ据え付け。14時少し前に上棟祭開始。 やや時雨れたが、祝詞の頃、日光差し神々しい。 (晴)
11月30日	向拝の唐破風取り付け。曲線優美、木目が素晴らしい。 夕方までに、渡りの柱や屋根下工作。 (晴時々曇)
12月3日	大橋五作さんが石屋二名を陣頭指揮し、狛犬一對奉納さる。17時に見事に建立。 (晴)
12月5日	御鞘のトタン覆せ終了。 杜誌編集会議第一回。
12月19日	幣殿破風取付けその他。 (曇時々晴 雪又は雨少々)
	向拝工事、終わり、その他の屋根下地工作。

12月21日	(晴) 外灯全部完成。四社分の燈明、全て点る。
12月23日	(晴) 拝殿の北の垂木工事。
12月28日	(晴 静か やや風) 若竹学園出身者、鳥居奉獻第一回発起人会。
12月29日	(快晴後晴 静穏) 北の庇で本年は打ち切り。
12月31日	(晴 暖か) 藤井一氏・吉田実氏ら、新しい社殿の照明灯取付。 初詣での人々に備える。

昭和六十一年

1月1日	(曇) 静穏な新年を迎える。仮殿の歳旦祭二年目。新拝殿も参拝者多数あり。 白布に賽銭があがる。
1月5日	(晴 強風 雪ちらつく寒気厳し) 若竹鳥居発起人会、第二回。会員の消息が拡大した。
1月6日	(晴 小雪ちらつく) 造営工事初仕事。棟梁二人。 拝殿南屋根下の垂木工事。 七時三〇分より十八時まで。

1月7日	(晴) 拝殿南庇工事進む。日光燦々。棟梁曰く「一枚脱ぎました」と。
1月9日	(晴) 棟梁二人。幣殿屋根下工事。八時四十五分より十八時まで。
1月11日	(晴) 棟梁二人。拝殿南屋根工事。二重垂木の外側の部分。圍製材二人。シート補強。
1月13日	(雪 みぞれ) 棟梁二人。 悪天候。焚火のサービス。
1月16日	(晴時々曇 暖かい) 棟梁二人と圍製材より一人。向拝屋根工事。
1月29日	(晴時々曇 暖かい) 棟梁二人。常任理事会と建設委員会あり。
1月30日	(晴) 棟梁二人 社誌編纂第四回会合。
2月1日	福谷、斎藤、佐々木氏。 (晴)
2月3日	棟梁二人。打ち合わせの人、一・二名来社。向拝先の天井裏見事。精緻にして優美なり。 (晴、時々曇)
2月18日	棟梁二人。向拝屋根下工事。 (曇後雪) 棟梁二人。雪の中で造営工事。

2月22日	(曇後晴) 棟梁二人。丸柱彫刻、織細。
2月26日	(快晴) 棟梁二人。幣殿、拝殿軒先工事。
2月27日	(曇 一時晴 雪しぐれ) 金森棟梁一人。西脇宏美氏と水谷恒夫氏が、足場が上がって激励さる。 「カワトウにあかぎれの膏藥がありますよ」と。
3月2日	(晴) 金森氏。
3月3日	玉垣あと百本。 (雨後晴) 棟梁二名。園製材一名。軒先工事。
3月5日	(晴) 金森氏。休憩なしの猛烈な作業。
3月12日	(晴) 棟梁二名。破風の下。カンカンと工事の音。
3月13日	(晴) 棟梁一名。吉田委員長曰く「北側の軒先の工事が立派にできた。」
3月28日	(雨時々曇) 大工、瓦屋。
4月2日	(快晴) 棟梁含む三名。板金屋も仕事。
4月3日	(晴後曇 夜半雨) 浅井棟梁一名。建設委員会あり。

4月5日	(晴、朝風あり) 金森氏。板金太田氏。
4月6日	(晴後曇 夜風雨) 瓦葺き始まる。夕方、委員長と古川武昭氏来社。
4月7日	(曇、雪時雨後晴) 瓦いよいよ本番。拝殿の南、殆ど出来た。
4月9日	棟梁二名、幣殿工事。 (曇後雨)
4月14日	棟梁二名。渡り破風。 瓦屋拝殿の屋根葺き。 (晴) 棟梁・瓦屋。電気カンナのうなり。瓦昇降機の音、にぎにぎしく工事進む。
4月21日	(晴時々曇) 棟梁二名、瓦屋、石屋。 正面玉垣、半分建つ。
4月22日	(雨) 棟梁二名、園製材二名、石屋四名、瓦屋三名、合計十一名。
4月26日	(晴) 金森、浅井、両棟梁。 かなな屑八袋あり。
5月8日	(晴) 棟梁含む三名。拝殿上部の板壁、幣殿腰板。
5月10日	(晴) 棟梁含む三名。彫刻検査あり。

5月12日	(快晴) 棟梁含む三名。幣殿、拝殿の板壁。
5月13日	(晴後曇) 若い大工。渡りの床貼り。
5月21日	(晴) 棟梁含む三名。 建設委員会。 神饌所の棚板貼り。本殿正面の角樋も、もう掛かっていた。
5月23日	(快晴) 棟梁含む三名。幣殿前の虹梁に繊細な彫刻。 小野板金拝殿屋根流れ棟の先に巴紋の金具打ち。 園製材、天井用の平板を、一杯社務所に拡げて乾燥。
5月26日	(晴) 棟梁含む三名、大天井の棧。
5月29日	(雨) 棟梁含む三名。 拝殿の天井完成。
5月30日	(雨後曇) 拝殿の天井板、棧の加工。
6月4日	(晴、一時曇) 社誌編纂。福谷氏。 定例工事打ち合わせ会。建具決定。
6月25日	(雨、一時曇) 金森、浅井両棟梁、拝殿下の長押取付け。小野板金、北側の幣殿の縦樋を取付け。

6月30日	(曇時々雨) 棟梁二名。長押工事。
7月2日	川添左官、拝殿破風下の漆喰工事。
7月3日	社誌編纂。富司、福谷氏外一名。工事経過の口述テープを次回までに文書化すること。
7月5日	工程会議。吉田委員長、西脇参与、海野課長、金森棟梁外二名。
7月8日	外玉垣の記名順の抽選。山田会長外、総務・事務局五名。
7月9日	金森・浅井両棟梁、長押取付け完了。向拝瓦葺き終了。藤一建設、境内に玉砂利を敷く。
7月10日	工程会議。吉田委員長外八名。樋の形式に苦心。
7月12日	奉賛会理事会。玉垣の件。
7月13日	氏子総代・神事委員会合同会議。大橋清委員長が議長。本殿遷座祭について。
7月15日	金森棟梁、幣殿南階段完成。
7月16日	松井石材、神明鳥居搬入。拝殿階段下の石張り。
7月17日	森電工、向拝電灯等取付け。夜、神事委員・総務会。餅撒・稚児の小委員会新設が決まる。
7月18日	森電工、室内照明器具取付け完了。
7月20日	棟梁二名、拝殿正面階段完成。
7月22日	餅撒委員会。委員長大飼藤市氏。
7月23日	本殿内狛犬の修理完成。黒塗りの芸術品。
7月24日	工程検査と理事会。本殿遷座祭を中心とする諸行事を決定。棟梁二名、拝殿南階段を仕上げ。神明燈明台かさ上げ。向拝用の彫刻納品。

7月27日	稚児委員会。委員長小野仁六氏。田代神社役員と御造宮奉賛会役員の合同会議五十六人。八月二十八日午後八時、本殿遷座祭執行を確定。
7月31日	松井石材、社殿敷地周囲の石張り工事完成。
8月2日	川添左官、土塀の下部コンクリート化粧。
8月5日	棟梁二名、幣殿階段上の天井張り。
8月6日	村上肥出夫氏、社頭の墨絵を揮毫。この絵を記念扇子の原図とする。
8月8日	長沢建具店、建具取付け。海野課長、宮司に社殿の鍵を渡す。
8月9日	社殿は彫刻を除き完成。園製材、後片付けと掃除。大橋清氏、本殿厚畳を奉製して敷く。本日より社殿の戸締りをする。
8月10日	久米建築事務所の古川武昭氏、竣工検査。宮司夫人連日麦茶の接待（水を入れて冷たく）。
8月11日	藤一建設、拝殿周囲に玉砂利を敷く。松井石材、神明鳥居を建てる。小野板金、縦樋二対取付け。
8月13日	洗い清め、会長以下二五名奉仕。棟梁二名、拝殿の懸魚取付け。間組工事事務所撤収。
8月14日	棟梁二名、幣殿・渡りの懸魚取付け。
8月15日	午前六時、新殿祭。今日から三日間を新殿公開とし昇殿拝観者で賑わう。
8月17日	神明鳥居渡り始め。若竹学園（敬神子供会）同窓生有志一二〇名の奉納。引き続き狛犬の除幕式。奉納者大橋五作氏の手で除幕。
8月20日	御歛神社例祭、仮殿における最後の祭。

8月24日	平井栄一氏、注連縄奉納。大橋神事委員長と共に「しめのこ」を出す作業。中村春男氏、柳。宮司一家、遷座祭事務と絹垣縫い等で徹夜。提燈三十張届く。
8月25日	玉垣全部立つ。御簾、御幌等で新殿装飾、神々しい殿内は目映ゆいばかり。
8月26日	拝殿・向拝の彫刻を取付け、名棟梁二人とお別れ。多岐神社で「威儀の物」を拝借。夜、消灯テスト。
8月27日	伊藤幸範氏、拝殿畳二十八畳奉納につき、自身掃除に来社。森電工、燈台（ぼんぼり）提燈の配線。
8月28日	午後八時、本殿遷座祭執行。肅々と遷御の列は進み拍手の音が沿道にひろがる。入御の直後、靈雨一過に身も心も洗われる。
9月5日	金森棟梁、森電工、残工事。
9月8日	長沢建具店、立付け直し。
9月10日	社誌編集―宮司、福谷氏外一名。手水舎の屋根修理。夜評議員会―餅撒き、稚児社参の件。
9月11日	巫女十二名、親子で衣装合せ。
9月12日	神事委員、奉祝祭準備、餅棚幕張りその他。宮司、奉賛会長、御造宮記念植樹。
9月13日	御遷座三〇五年記念大祭並びに御造宮竣工奉祝祭参列一五〇名以上。直会（旧高小講堂）の後、餅撒き三〇俵。群衆歓声をあげ。タツブリ拾う。
9月14日	奉祝稚児社参、六〇〇名余。稚児宿―山田会長、細川総代長、上田副会長宅の三家。

昭和六十二年

9月24日
御遷宮後第一回の例祭。夜、奉納どじょう踊り、太鼓七柄揃い打ちで盛大。おびただしい灯火に照らされた新社殿が龍宮城もかくやと浮かび出る。

1月18日	宮司、山田会長等七名、伊勢神宮へ御礼参り。
7月3日	奉賛会理事会。決算を承認。本日をも以て奉賛会の会計を閉鎖し、残務は田代神社へ引継ぐ。
7月11日	評議員会三八名。決算報告。寄附者全員に決算報告書を配布される様、依頼。閉会后、中山定美氏により、御造営記録ビデオを上映。
9月22日	「昭和御遷宮記念碑」の除幕式。石工藤井庄吾氏の寄進。宮司、総代長、奉賛会長等三名で除幕。
12月28日	御造営記念として「田代神社誌」を出版。



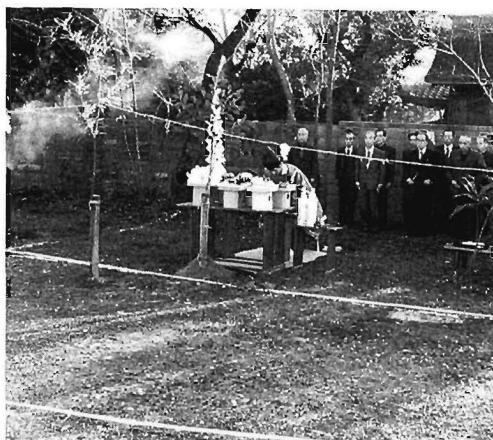
新社殿完成予想図

三、第一期御造営のあゆみ その1

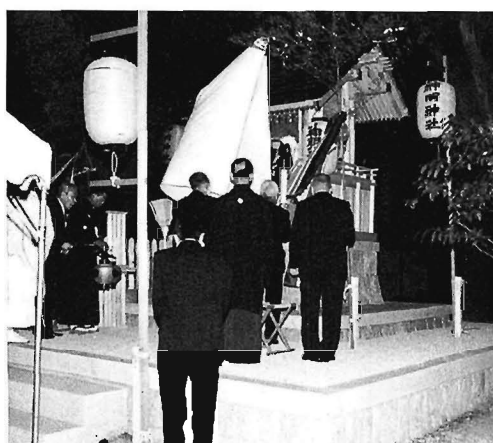
昭和56年～昭和58年



稲荷鳥居渡り初め



着工奉告祭



神明神社本殿遷座祭



定礎の儀



旧社地稲荷神社お別れの儀



稲荷神社本殿到着

第一期御造営のあゆみ その2



神明神社・稲荷神社御遷宮奉祝大祭



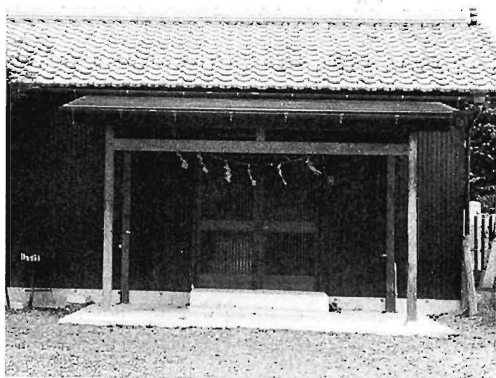
稲荷神社お引き渡しの儀



神庫再建工事中



稲荷神社本殿遷座祭



神庫



新本殿敷地標柱除幕式

四、本工事を目前とした田代神社（昭和59年秋）その1



正面（東側より）旧拝殿



社務所



旧拝殿北側より



氏子集会所



旧本殿、旧幣殿



手水舎

本工事を目前とした田代神社（昭和59年）その2



旧社殿最後の太鼓参入



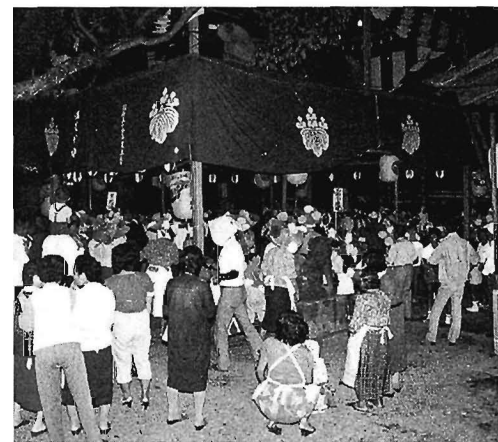
旧社殿群



旧社殿最後の神明まつり



旧社殿最後の例祭社頭



旧社殿最後のどじょう踊り

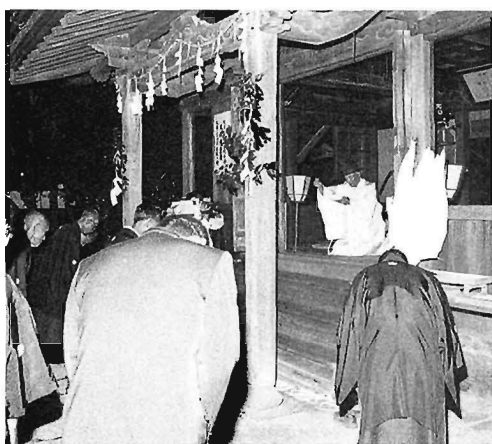
五、第二期御造営のあゆみ（写真集） その1



仮殿遷座祭



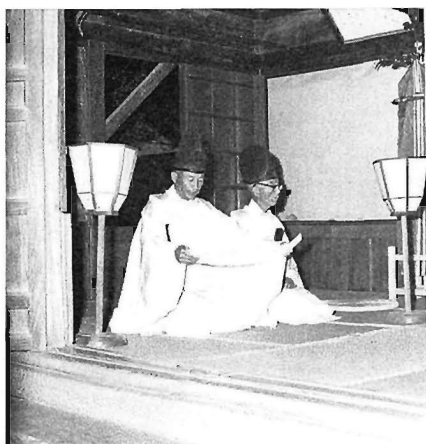
本工事起工奉告祭



仮殿遷座祭



本工事起工奉告祭



仮殿遷座祭



本工事起工奉告祭

第二期御造営のあゆみ

その2



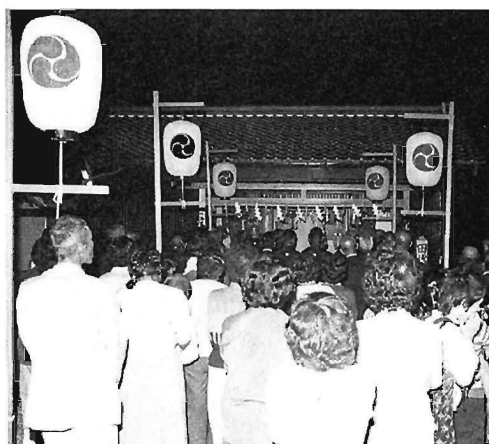
旧社殿撤去



仮殿遷座祭



旧社殿撤去



仮殿遷座祭



旧社殿撤去



旧社殿撤去



いなり道



地鎮祭



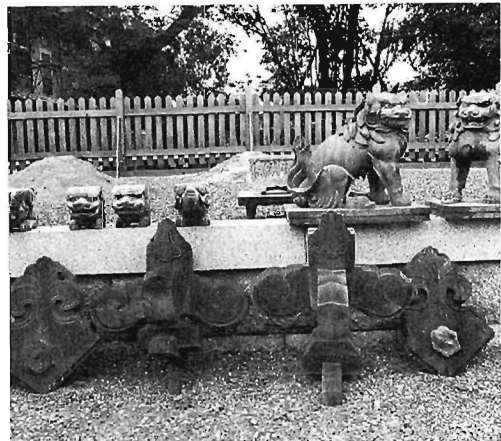
境内地造成



地鎮祭



昭和60年正月 社頭



本殿内狛犬等

第二期御造営のあゆみ その4



本殿基礎工事



昭和60年正月 仮殿



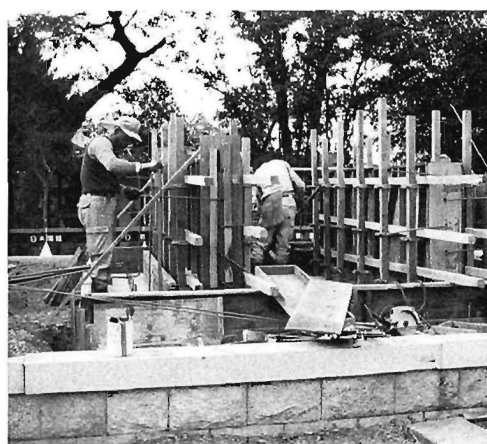
本殿基礎工事



内玉垣建設



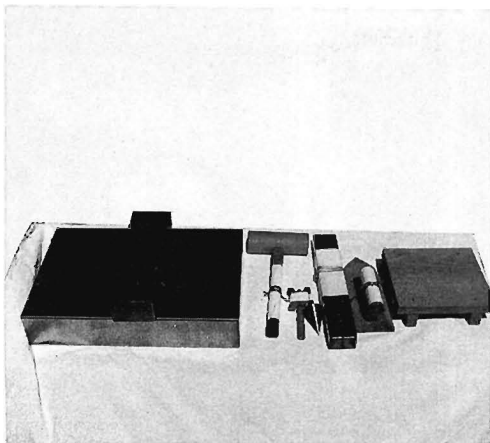
幣殿・拝殿基礎工事



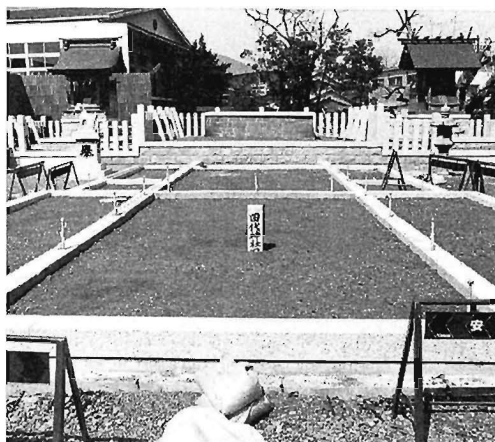
本殿基礎工事

第二期御造営のあゆみ

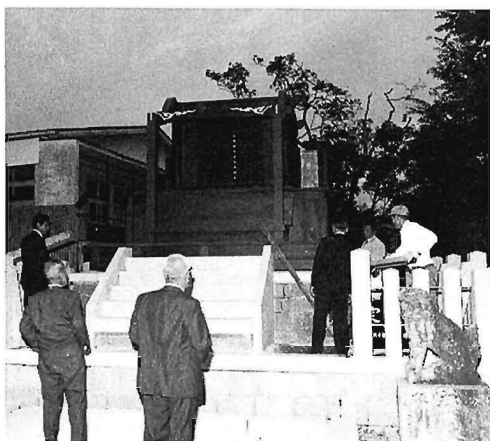
その5



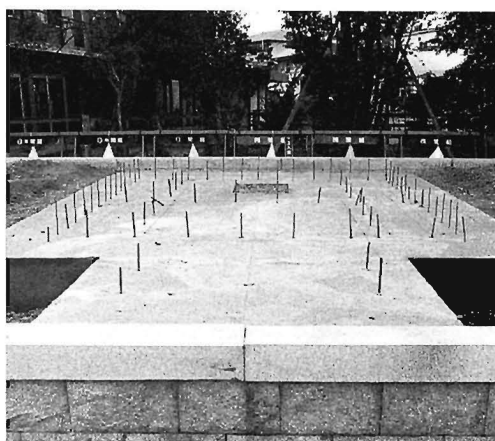
定礎式用具一式



幣殿・拝殿基礎工事



本殿搬入



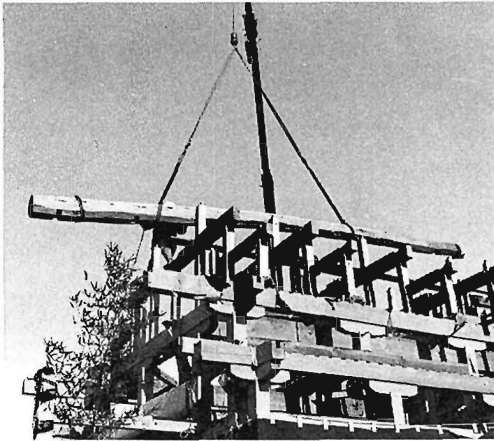
幣殿・拝殿基礎工事



立柱式



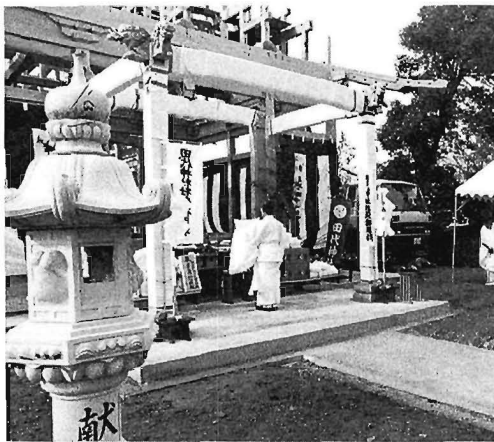
定礎式



上棟祭



立柱式



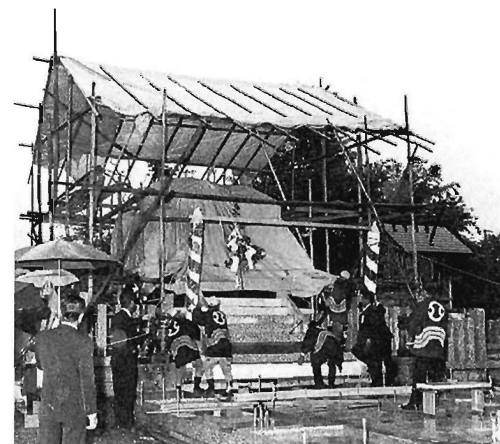
上棟祭



立柱式

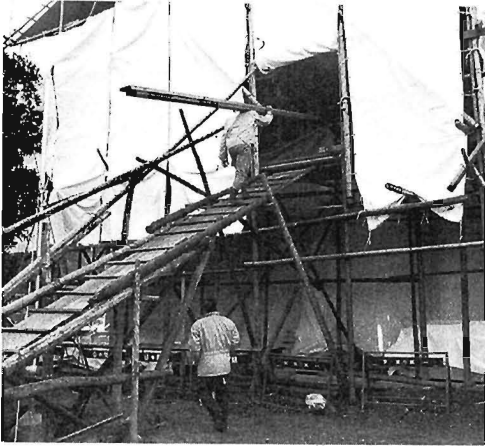


上棟祭



立柱式

第二期御造営のあゆみ その7



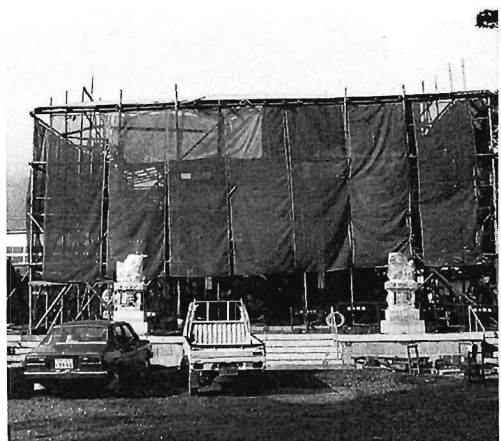
社殿建設工事



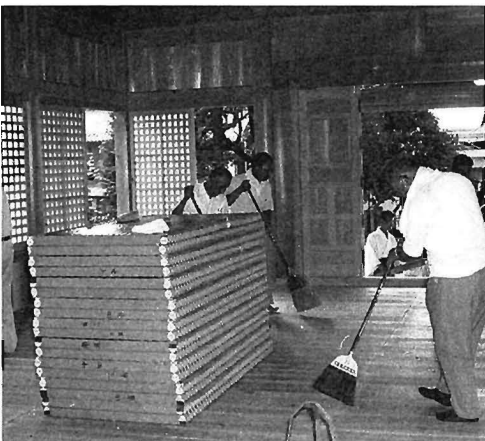
本殿清祓



社殿建設工事



社殿建設工事



洗い清め



社殿建設工事

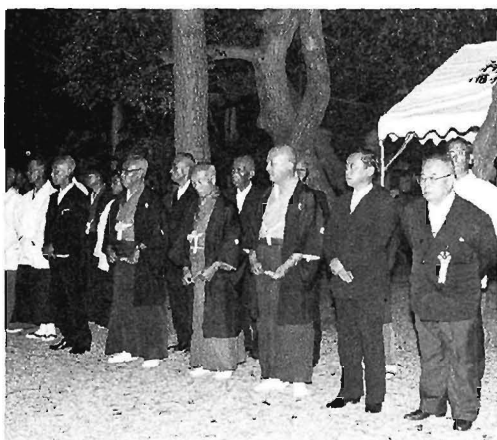


記念植樹



洗い清め

六、本殿遷座祭以降（写真集） その1



本殿遷座祭



本殿遷座祭



本殿遷座祭

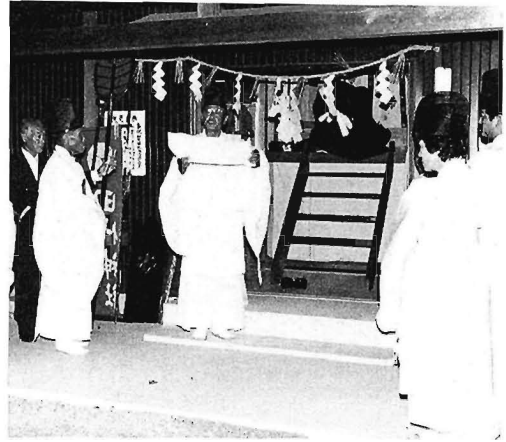


本殿遷座祭

本殿遷座祭以降 その2



本殿遷座祭



本殿遷座祭



本殿遷座祭



本殿遷座祭



本殿遷座祭

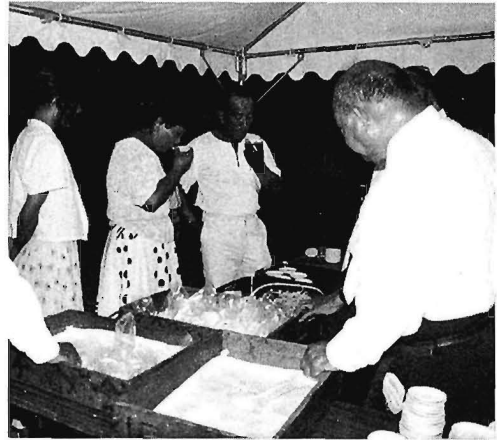


本殿遷座祭

本殿遷座祭以降 その3



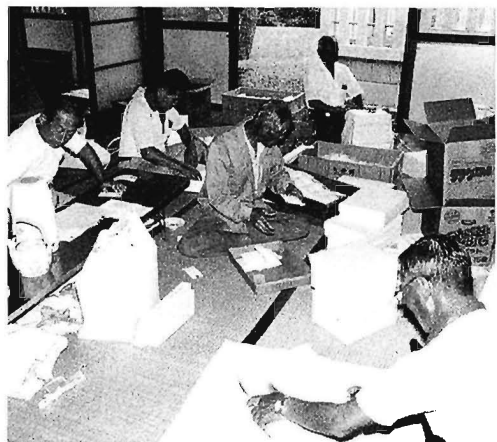
竣工奉祝祭



本殿遷座祭



竣工奉祝祭



竣工奉祝祭



竣工奉祝祭



竣工奉祝祭



竣工奉祝祭



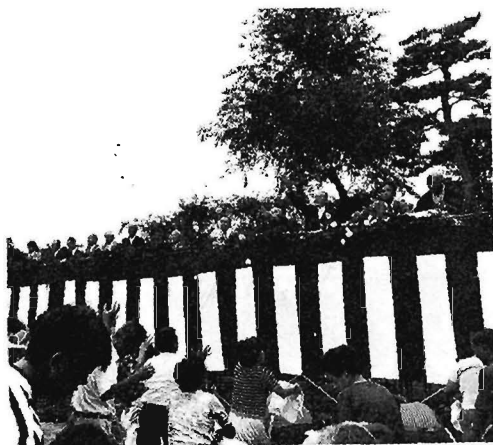
竣工奉祝祭



奉祝餅撒き



竣工奉祝祭



奉祝餅撒き



竣工奉祝祭

本殿遷座祭以降 その5



奉祝稚児社参



奉祝餅撒き



昭和61年例祭



奉祝稚児社参



昭和61年例祭



奉祝稚児社参

本殿遷座祭以降 その6



本殿彫刻

氏子崇敬者一同敬白

此處祭典 奉祀 高田
田代神社 御遷座奉賛会長 山田良造
氏子総代長 細川 勇

裏

奉
改築田代神社本殿
遷座祭
諸儀式畢

宮司 大橋正廣 施工 株式会社 間組

表

棟 札



狛犬



向拝彫刻

七、田代神社役職員一覽

(省略)

八、氏子・崇敬者一覽

（省略）

九、御造営に寄せて — 感想文集 —



“起工式に参列して”

岐阜県神社庁副庁長 森 磐 根

私は揖斐川の対岸の今尾神社の出身で、養老郡内にも兼務社があります。田代神社のこと、大橋宮司さんのことも、幼少から先代によく聞かされて育っておりますので、今回の御造営にも、先程の経過のことなどを、いささか承知いたしておりました。それだけに、永年の懸案を解決して、ここに起工式のなりますことをまずもってお喜び申し上げます。

氏神様は、私共氏子の魂をあずかって下さいます。特に、御当社田代神社に思いをよせて、この御社名の田代ということばがありがたい。それは皇孫が高天原の田作りのわざを御祖神の事依しことよさとしてこの大八洲おおやしまに天降られておひろめになった。そのみこともちは、御鏡をおまつりして思想をかため、田を拓いて民生を安定せしめ、生成発展、修理固成して、国づくり、人づくりの歴史を重ねてきました。田代とはそのまま私たちのこの神代ながらのくらしの道に由来するものであると思います。私共は、このくらしの道を伝えて、これから先も永く平和を繁栄の御代たらしむべく次代に申し継がねばなりません。いまその時を得て、昭和の御造営にあずかる皆様にお願ひ申し上げたいのは、神社神道に対する認識が、戦後は非常に狭く、窮屈になっております。町内の寄附金にしても、信仰の自由の憲法違反といった議論も時に耳にします。それであえて私はここに神社はまず観光だといっておるのです。観光だというと何か金もつけか物見遊山のようなことの人寄せぐらいに思われております。しかし本来の観光と

という言葉の意味は、易经なんかによれば、観とは、手を洗うタライ、これは祭器です。お祭りの前にまず手を洗いを漱ぎます。あの心得、つつしみから出た言葉であり、光は、これは添えて、だから郷土の光を観ることなのであります。日本ではどこへ行っても、神社仏閣は観光の第一です。それは先祖への報恩と供養にその感謝の誠を捧げる。愛郷心のあつまるところですから、その町その村の開拓の祖神をおまつりし氏子の魂をあずかって下さる氏神さまと、その氏神まつりは、その村、その町の誇りであり、正気であって、ゆえに、まつりにはその町の民情が一番よくあらわれてくるのであります。観光地といえば名所旧跡があり、風光明媚の公園などには、郷土の為に尽した人々の顕彰碑か忠魂碑があるのも、みな次代に継ぐべき愛郷へのおもいがかけられてのことからなのであります。

さて、高田まつりが高田の人々の心意気でもありますように、今度の御造営もその心意気を昭和の御代の栄えのしるしとして歴史に祈念していただきたいのです。お伊勢様の御遷宮が日本民族のたましいの若がえりと昂揚でもあるように、皆様の町内とお家の繁栄に、田代の大神の御神徳を称えますます発揚するの志で、御造営を完遂されますよう祈念申しあげて祝辞といたします。

“幽玄の宵”

麦房神社宮司 高木清治

まだ蒸し暑さを残しながら昏れなずむ宵の町、ここ養老町高田田代町の一角に、時ならぬ古代絵巻が繰り広げられました。

街の灯、境内の明りが一齊に消えますと、忽ち下りる夜のとばり、幻想的な世界が現出されます。燃えさかる篝火・火むらが赤々と居ならぶ神職の白狩衣に映え、星影さえも控えた空の下・境内にひしめく参拝客もしばし鳴り

を静めます。

ザク、ザク、踏みしだく小砂利の参道、おぼろな提灯の灯影が、進みゆく烏帽子の頭上に、続く総代の紋服の肩上に遊ゆうよくびします。

やがて仮殿におわします大神さまを、静々とお遷しする儀式に入ります。

夜目に鮮やかな白妙の絹垣、お護りする神職の群は一樣に息をひそめての歩み、外苑をめぐる遷御の列は、かそけき灯に導かれ、繰りのべられる筵道えんどうを渡ります。

静かな夜空に流れる奏樂、笙しょう、箏ひちりきの音色が、人々の魂を古代へ誘いざなうかのよう、そこにただよう神秘、夢幻の雰囲気は、まさしく記紀万葉、古典の世界です。

“何ごとのおわしますかは知らねども”

かたじけなさに涙こぼる”

時代は下がりますが、歌人西行が伊勢の大宮を伏しおがんで詠みました。その歌の心がしみじみと、目に見えずとも世に神さまはおわします。浄闇の中にひしひしと感かんじるのでした。

そして入御、大神さまのお遷り了えるのを待ちかねたかのように、更けた空から沛然はいと来る雨脚。天つ神もことほぐかのごとき、心にしみる祭儀の宵でした。

“御遷座祭を拝観して”

崇敬者 会社社長 岩間 泉

この日も暑くはあったが、陽が落ちると、養老の山裾の川原にはすすきがゆれて、さすがにここでは夏の終りであつた。

暮れてくると、山も見えず森も畑も夜暗に沈んで、僅かに町の家並みから灯がこぼれているだけであつた。

月は昇らず、すべての燈火を打消した社の木立ちは、闇がさらに濃かつた。その中に肅然と堵列する一群の人影があつた。今宵本殿遷座祭の召立に従つて仮殿前に整列した方々であつた。

やがて、警ひつゝの声とともに行列は動き始めた。若者が身を屈めて御道敷布を展べ、その両側を、二本の長い松明、榊等の前陣が静かに歩んでいった。その後ろから高く掲げられた白い行障絹垣があらわれた。それらは闇黒に灰白く浮かび松明の赤い明滅を受けつつ、一步ごとに揺らめいてゆつくりと進められてきた。ご神体の奉戴はもとより窺い知るべくもないが、中世祭祀の様式の神秘的な美しさに息を呑み、深く頭を垂れた。続いて多くの紋付袴、モーニング姿の後陣供奉の列が従つた。

渡御につれて、沿道からは柏手の音が小波のように連なり、列は鳥居をくぐり拝殿を昇つて、本殿に入御された。本殿の横に廻り仰ぎ見ていると、暫くの後斎主が身を屈めて退出し帳を下ろした。斎主は冠を戴き赤袍に白たすきをかけ白覆面手袋をつけていた、尋常ならざる装束と膝行の姿勢に、この事業の大きさ、祭事の重さを卒然と悟つて胸を突かれた、いま御心中を去来するものは何であろうか、私もまた感慨に浸つてながく仰ぎ見ていた。

突然、一せいに燈火が点ぜられ庭燎に火が入れた。社殿は目映ゆいばかりに白く、そして壮重に聳えて見えた。煌々と開け放たれた拝殿の内には、礼服の人達が居流れていた。どの顔も上気して、盛儀に際会した喜びと興奮を抑えかねているようであつた。

拝殿の前に群がり集まつた人々から、賽銭が次々と投げられた。直会の仕度を下知するのか、内と外で口早やに言葉が交わされ、幾人かが小走りに動き廻つた。

ここでは、言祝ぎに湧いて、夜の更けるのも知らぬげの光景がくりひろげられていった。

かねて御遷座祭なるものを一度拝観したいと望んでいたところ、この度ようやく叶えられ、しかも御先代宮司以来ご厚誼をいたゞいている田代神社とあつては、ご同慶この上もなく二重の喜びでありました。同時に、御造堂の事に当たられた方々の、ここに至るまでのご苦勞に対して深甚なる敬意を捧げるものであります。

十、若竹学園のこと

昭和二十三年、敗戦の痛手が未だ癒されていない頃、氏子の子供たちと、当社の大橋正廣禰宜との間に交流が芽生えた。

当時二十一歳だった青年神職が、お参りに来る子供と親しくなるのは、ごく自然のなりゆきであった。最初は境内で遊んだり、古い雑誌を貸す程度の触れ合いだったが、子供達の希望にこたえて、氏子集会所で勉強会を始めると、寄り集う子供の数は一日に増えて行った。そして、行事内容も、家庭・学校と並ぶ、子供達の生活そのものとして、多彩に展開していった。

全く自然発生したこの現象が、田代神社敬神子供会となり、一名「若竹学園」と称する様になったのだが、勉強の傍ら、お宮の掃除をし、お祭りにも大勢で参加する子供達の姿は、人々に明るい未来を告げていた。

以来十七年、昭和四十年頃までに入園した子供は合計千人以上に達したが、戦後日本の復興に伴う生活・文化の著しい発展により、子供達を取り巻く環境も整備され、地域の子供会はそれぞれ立派に運営される様

になり、又大橋直廣前宮司の死亡に伴い、正廣禰宜は宮司となって、職務に専念せざるを得なくなつて、このドラマは幕を閉じたのである。

尚、話は前後するが、若竹学園が残した影響について、新聞記事等を引用してご紹介させていただきたいと思う。

その一

昭和24年9月6日付の「東海夕刊」——抜粋——

「養老の山麓に若き良寛さん」

遊べそして学べ

——児童善導に情熱捧げる大橋君——



養老の山麓に若き良寛さん
遊べそして学べ

児童善導に情熱捧げる大橋君

（以下、新聞記事の抜粋）

「田代の先生歌教えて頂だい」―無邪気な子供たちの声に代わってハチ切れるようなバスが破れた社務所の窓から流れてくる。

聞けとうとうの滝の音、千古の歴史を伝うなる、養老山のこの麓……

これは岐阜県養老郡高田町田代神社に繰り展げられる「敬神子供会」のひとつ、粗末なオルガンの周囲には七、八歳から十四、五歳までのイガ栗、おかつぱ連が青年教師を囲んでいる。白の上衣に萌黄の袴でオルガンによりかかったこの教師こそ「昭和の良寛さま」と近郷の人望を集めている田代神社祢宜大橋正廣氏である。

この塾は昨年二月顔なじみの児童数名が正廣氏を訪れ「辞書がなくて困る」「教えてくれる人がない」と子供らしい悩みを訴えたのに「よろしい引受けよう」と爾来一年六ヶ月日曜も祭日も忘れ風雨もいとわぬ文字通り児童奉仕の生活が始まった。その後意外な反響を呼び、現在では三百六十名の大世帯に飛躍した。

会員の顔ぶれは年齢も境遇もまちまちで、幼稚園児から高等学校生徒まであり、寺院・警察署長・日雇労働者の子弟から日吉・多芸の隣村児童まで交るという

賑やかさ、学習内容も珠算・楽器・英語・社会と各自の研究題目を始め、例月二回の役員会を始め誕生会・反省会・写生会・遠足・展覧会・宝さがし・早起き会・水泳大会なども織込み、これがため三百六十余名の指導に寧日ない正廣氏の辛苦は並々ならぬものがある。

(以下略)

その二

昭和36年4月 神社本庁は「神社に関する組織・施設の手引き」というパンフレットの中で、若竹学園を模範例として七ページにわたって紹介している。左はその一部である。

田代神社敬神子供会（若竹学園）

岐阜県養老郡養老町

年間行事

一月 新年子供大会 テスト（英・国）

二月 卓球大会 節分子供会 テスト（数）

三月 卒業奉告祭（会食）子供大会 技能テスト（ピ

アノ・ソロバン・シロホン・ハーモニカ・歌）

四月 ピクニック（宝捜し）卓球大会 学力テスト

自治計画会

五月 写生大会 学力増進テスト(社・英) 自治計画会

六月 子供会 学力増進テスト(社・英) 大掃除 自治計画会 — 以下略 —

その三

昭和62年1月15日付の岐阜県神社庁発行の「うぶすな」誌に「若竹鳥居の奉献」という見出しで次の通り報道された。

養老町高田の氏神田代神社(宮司大橋正廣)では、この程二年有余にわたり造営中の諸工事が竣工、去る八月二十八日日本殿遷座祭、九月十三日御遷座三八五年記念大祭を執行、総事業費一億二千八百万円を以ての境内建物・境内地全体の総改築・拡張整備の完成を祝った。

この事業に平行して、現宮司が三十有余年前に結成指導していた敬神子供会(一名若竹学園)の同窓生等(代表者中村隆司)に鳥居奉献の議が起こり、賛同者一二〇名が往時を偲びつつ、全国各地から続々と資金を奉納、北参道に石造神明鳥居を新築、去る八月十七日、盛大な渡り初め奉献祭を執行した。同窓生達はこ



春の子供パーティ (昭和25年3月31日)

の鳥居を「若竹鳥居」と名付け、幼なかりし頃、産土の社に集い、学んだ美しい思い出を永久に伝え遺したいとしている。

十一、田代神社祭事年番組一覽

昭和六十二年度

中町・東町・常盤町・永和町一・三・四班・永和町
二班・南町東組・下川原町・高北・高南東・高南西

昭和六十三年度

東洋町西・東洋町東・相生町・協進町蓮寺・協進町
下北浦・栄町・神明町・大正町・松山町

昭和六十四年度

西町の西・西町の東・宮西町・御所町・田代町・馬
場町・昭和町・元町・大和町・井口組・中組

—
資
料
編
—

昭和御遷宮

第一期事業

- 一、田代神社本殿敷地に桧柱の玉垣を新設。
- 二、神明神社本殿官材赤身檜製
間口三尺一寸を造替。(旧本殿の約二倍)
- 三、稲荷神社本殿官材赤身檜製
間口三尺を再興し(約九十年ぶり)桧製の鳥居を新築。(高さ八尺、幅八尺、末口八寸)
- 四、右三社の敷地として台地造成。(外周御影石積、台上玉砂利、間口十七・六米、奥行六米)。その上に神殿台座二社(御影石神明社三段
稲荷社二段)を築く。
- 五、参道整地、手水所新設、照明設備、植樹、石燈明移築等。
- 六、起工奉告祭よりご遷宮大祭迄の神事計七回斎行。
- 七、追加工事として、金刀比羅神社本殿再建。神庫改築。

氏子崇敬者各位殿

御造営第一期工事完了のお知らせ

神明神社造替・稻荷神社再興を主体とする今回の御造営は、皆々様の絶大なるご奉賛により、去る7月15日神庫の竣工式を以てめでたく完了いたしました。ここに厚く御礼申し上げます。就きましては下記の通り決算を終え、監査を受けましたのでご報告申し上げます。

記

神明神社 稻荷神社 御造営決算報告書

収入の部		支出の部	
科目	金額(円)	科目	金額(円)
寄附金(氏子崇敬者1,038)	17,501,500	固定資産	1,2365,000
預金利子	28,066	神明神社社殿	1,550,000
玉串料等	36,000	稻荷神社社殿	2050,000
		稻荷神社鳥居	360,000
		田代神社本殿用地玉垣	680,000
		金比羅神社社殿	235,000
		神庫一棟	2190,000
		基礎本工事	5,300,000
		雑工事	2373,680
		備品費	515,200
		事務費	303,700
		祭典費	1,632,993
		諸給与	205,000
		雑費	21,390
		田代神社御造営準備委員会へ引き継ぎ	148,603
合計	17,565,566	合計	17,565,566

会計 米山 静男 印
" 大橋 清吉 印

本日(昭和57年7月21日)私共は関係書類を点検し正確に処理されていることを確認しました。

監査委員 柏淵 千里 印
" 野村 一市 印

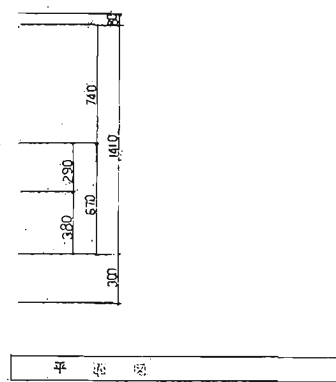
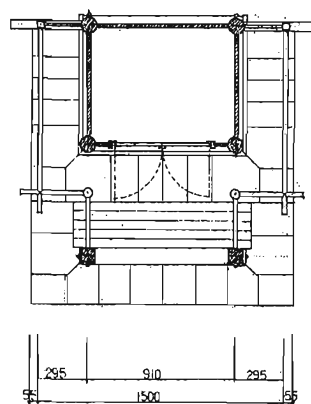
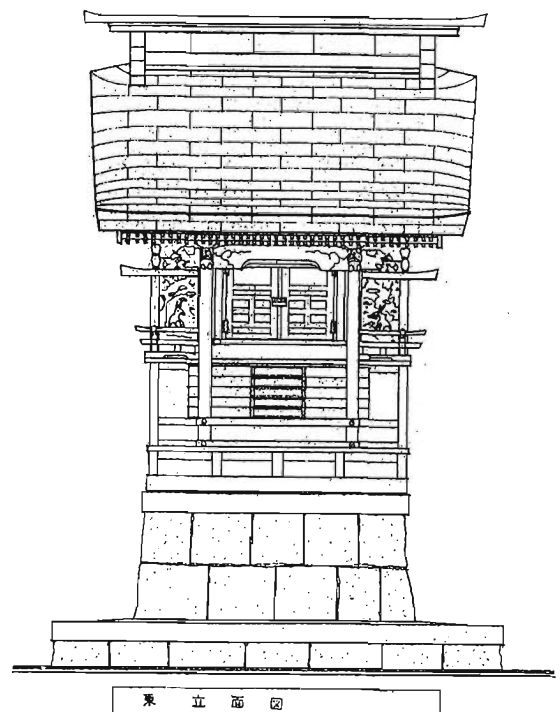
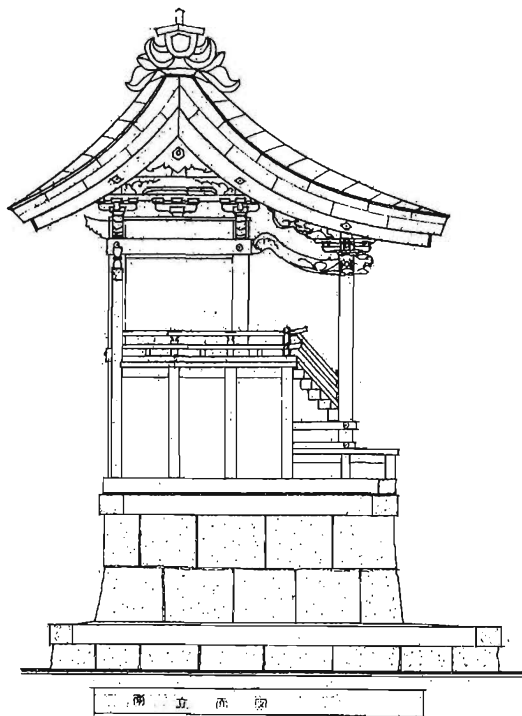
昭和57年8月

神明神社 御造営委員会
稻荷神社 委員会

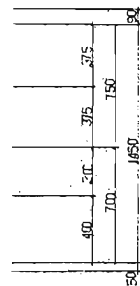
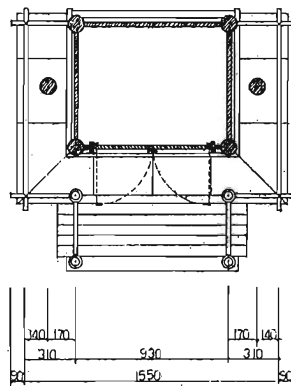
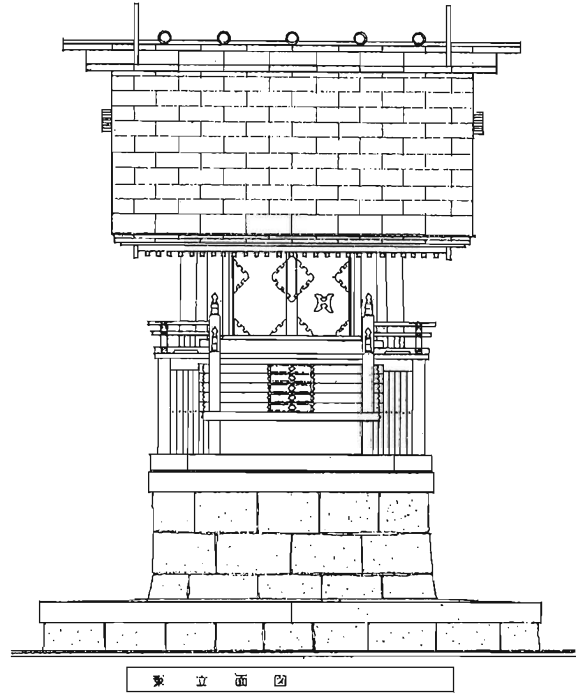
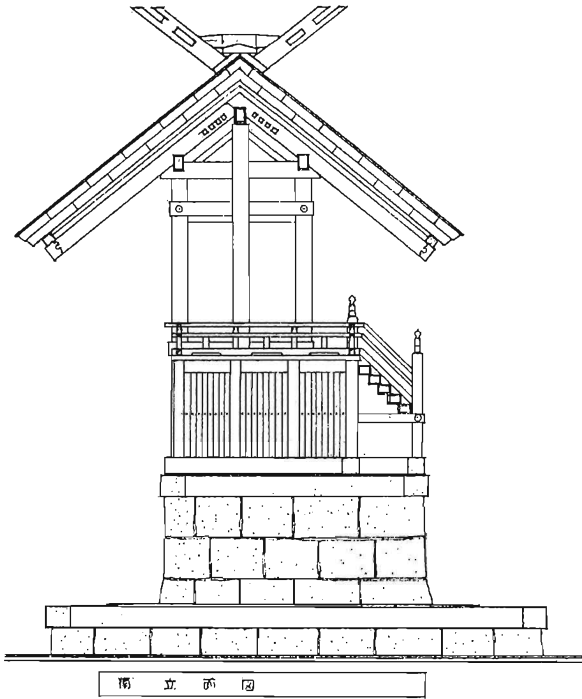
委員長 早米 崎山 肇
" 大橋 清正 男
田代神社宮司 大橋 正 吉

尚、本委員会はこれで解散いたしますが、御造営準備委員会は従前通り存続して本殿・幣殿・拝殿等御造営奉賛会の結成をめざして推進させていただき所存であります。今回再建出来ました神庫の中央には御遷宮用の仮神座を設置して次期御造営への布石といたした次第であります。今後共何卒よろしくお願い申し上げます。

稲荷神社工事設計図



神明神社工事設計図



第二期事業

〔主要神事〕

五九年四月一日

田代神社御造営奉賛会結成奉告祭

本殿造替 寛文十年（一六七〇）造営のものを復元

九月十一日

起工奉告祭

流造 一坪 屋根は銅板葺

九月二十七日

仮殿遷座祭

渡り殿新築

二坪

十月二十五日

地鎮祭

幣殿造替

一〇・五坪（旧の二倍）

六十年四月二十八日

定礎祭

拝殿造替

一四坪（旧の二倍）

九月十五日

本殿修祓式

向拝新築

二坪

十月六日

立柱祭

境内地造成

社殿敷地を地盛りして、石段を三箇所
に新設。南参道拡幅。

十一月十九日

上棟祭

石玉垣五二三本増設

六一年八月二十八日
九月十三日

本殿遷座祭
御遷座三八五年記念大祭並びに
御造営竣工奉祝祭

土堀・ブロック塀増設

右 施工 株式会社間組

棟梁 金森正秀・浅井光守

設計管理 株式会社、久米建築事務所

同 株式会社 三共コンサルタント

「昭和遷宮記念碑」新設

〔有志寄進〕

神明鳥居 一基

狛犬 一對

石灯籠 一對

神具・装束類六〇点

氏子崇敬者各位殿

田代神社御造営事業工事完了に伴う会計報告について

此の度の田代神社御造営に際しましては、氏子崇敬者の皆様方には趣旨にご賛同を戴き、多額の浄財の御寄進を賜り厚く御礼申し上げます。

ご造営工事につきましては工期が若干延引を致しましたが、御承知の通り昨年九月十三日竣工奉祝祭を挙行致し御神前に奉告致すと共に、餅撒き、稚児社参の祝賀行事を同九月十三日、十四日の両日に亘り奉納申し上げ無事終了致しました。

御承知の如く、御神殿境内共々面目を一新致し、昭和の御造営事業としてその荘厳華麗な威容を後世に伝え得ることが出来得ましたことは、氏子崇敬者各位のご協賛の賜物と重ねがさね深く御礼申し上げます。

各位の御芳志につきましては、去る六月十七日夜本会計の監査を監事三名全員ご出席のもと詳細に亘り照合監査を実施せられて御承認をいただいた次第でございます。

内容の明細については収支決算書を以てご報告申し上げますと共に役員一同を代表し深くお礼申し上げます。

昭和六十二年七月十一日

田代神社御造営奉賛会長 山 田 良 造
田 代 神 社 宮 司 大 橋 正 廣

収 支 決 算 書

収入の部

科 目	決 算 額	摘 要
基 金	51,916	
奉 賛 金	106,905,000	氏子、崇敬者 1,291 名
石玉垣奉賛金	14,560,000	356 本
銅板奉納金	894,185	859 枚
瓦奉納金	37,410	
受 取 利 息	1,186,241	
雑 収 入	279,866	餅撒委員会残金 244,090 円 稚児委員会残金 10,776 円 御祝
収 入 合 計	123,914,618	

支出の部

科 目	決 算 額	摘 要
固 定 資 産	115,061,800	神殿、幣殿、拝殿外附属する一切の物件 114,390,000 円 御神庫扉造付 155,000 円 御神庫板拝殿 282,800 円 プレハブ物置 234,000 円
備 品 什 器	902,200	御槌代及台、真榊、ビデオテープ・アルバム外
募 金 費	766,200	風呂敷
神 事 費	4,228,816	起工奉告・仮遷座・地鎮・遷座・定礎・神殿修葺上棟・奉祝各祭神事
雑 工 事 費	1,059,010	御造営全図看板、記帳札掲示用枠、記帳木札、記帳札塗装、拝殿提灯掛、樋受 仮拝殿軒樋、電灯修理
消 耗 品 費	43,000	
通 信 費	21,985	各神事の通知
損 害 保 険 料	160,000	神殿、幣殿、拝殿の火災保険料 1 か年分
会 議 費	438,800	理事会 24 回、評議員会 8 回外
印 刷 製 本 費	180,332	趣意書、領収書、コピー代、奉献記帳簿、各神事の通知等
写 真 費	11,500	御造営完成絵図複写
借 入 利 息	108,739	
雑 費	37,795	
支 出 合 計	123,020,177	

残 金 894,441 残金を下記の通り処分する。

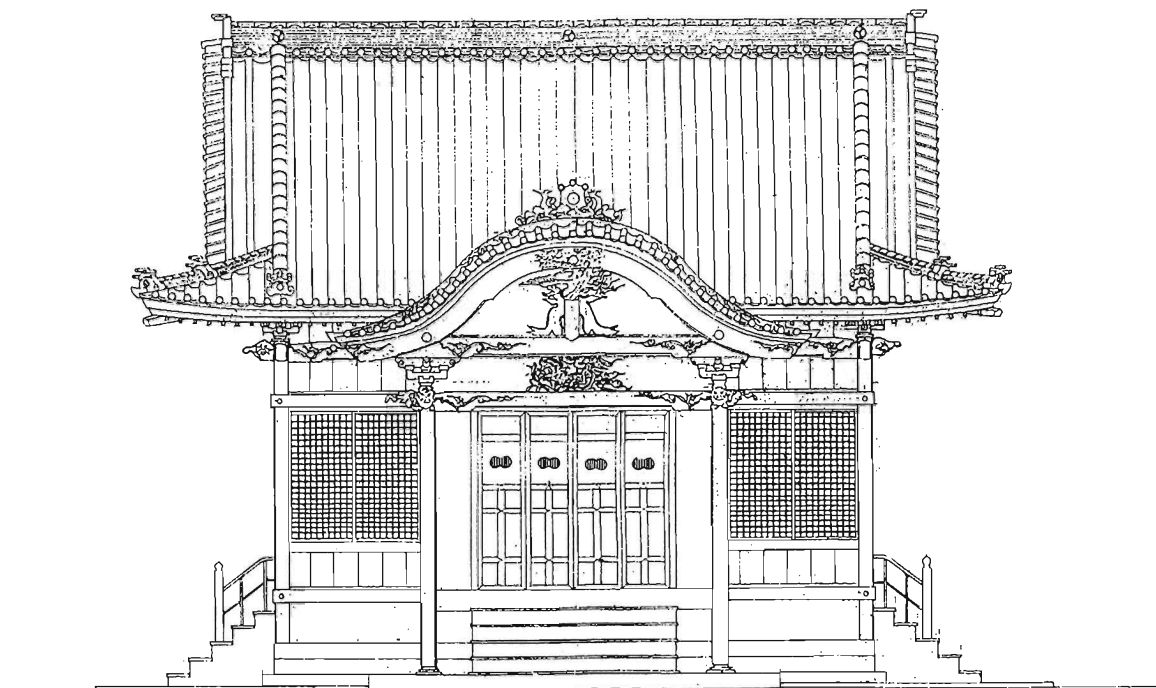
田代神社社誌 500,000 円
決算終了後の会議費 150,000 円
崇敬者に社誌、決算報告郵送料 50,000 円
決算報告書印刷費 20,000 円
精算後の剰余金は田代神社社費に繰入 174,441 円

昭和62年 6 月 17 日

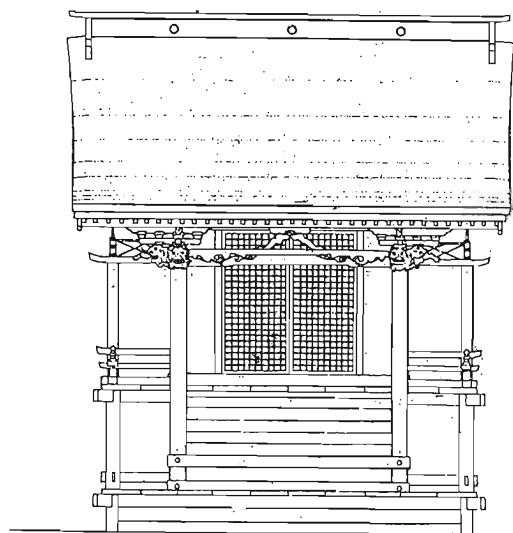
関係書類を精査の結果正確であることを証明します。

監 事 伊 藤 道 次 ㊞
" 久 保 田 新 治 ㊞
" 小 野 源 一 ㊞

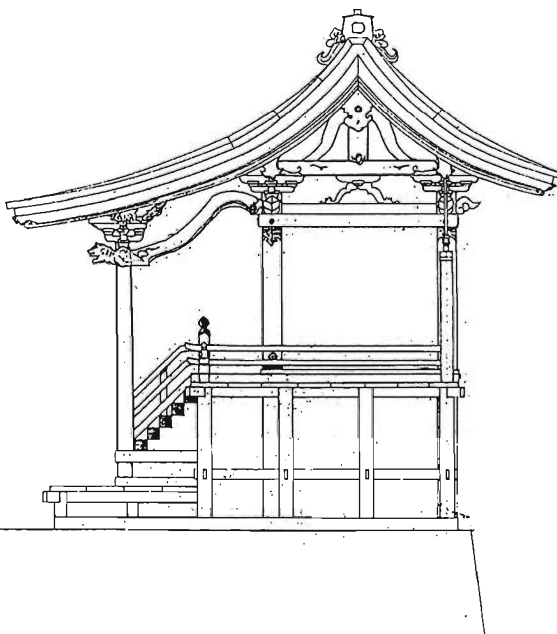
田代神社社殿立面図



拝殿東正面図

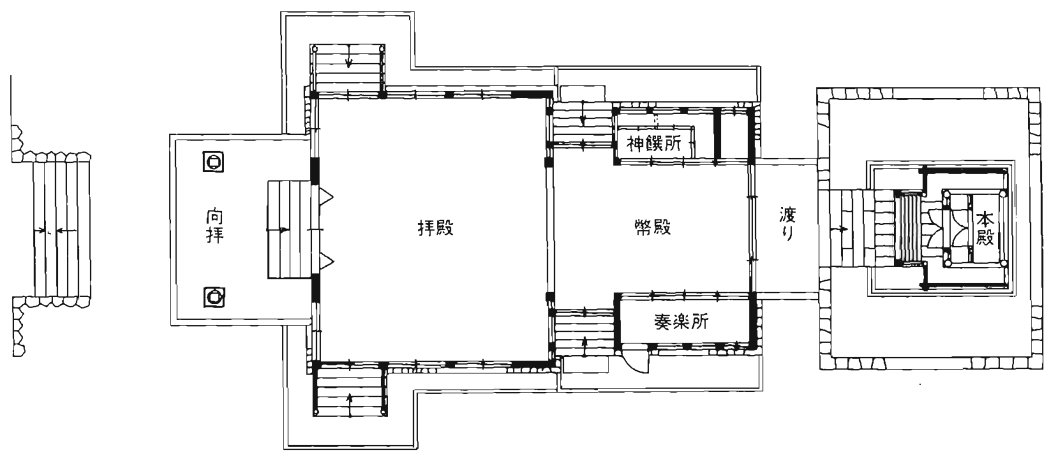


本殿東面図

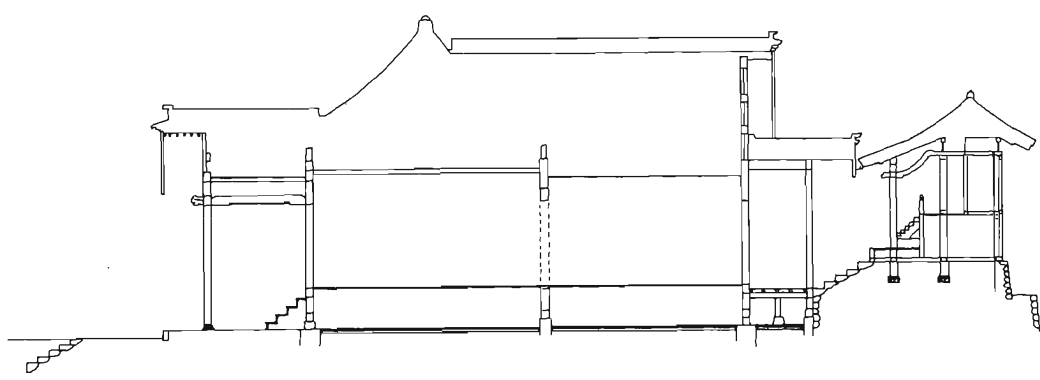


本殿北面図

田代神社社殿(平面図・断面図)



平面図

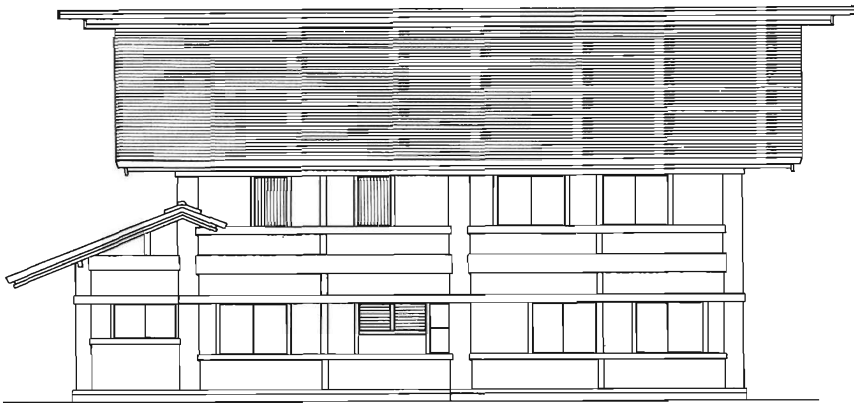


断面図

田代神社社務所立面図(宮司試案)



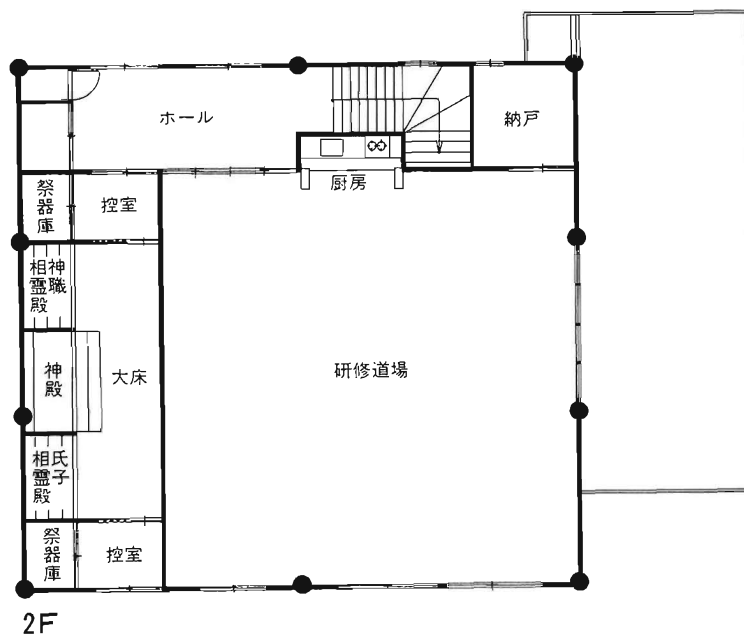
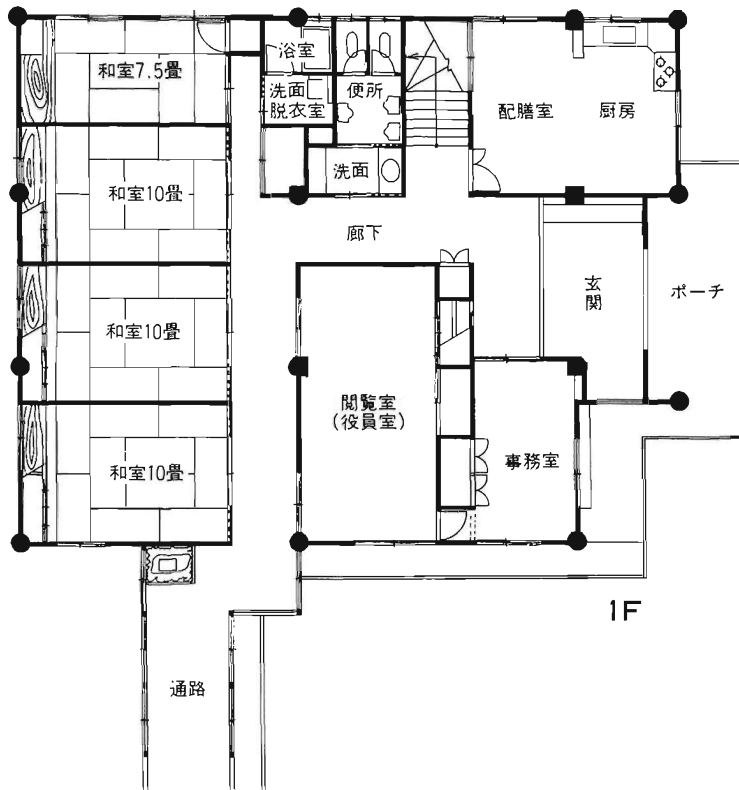
東立面図



北立面図

※備考 現社務所は推定江戸時代後期の建設（元寿量院）建坪60坪（198.3㎡）

田代神社社務所平面図(宮司試案)



文化財指定書

養文第一一七号

養老町重要文化財指定書

住所 養老町高田
所有者 田代神社 祭事年番

一 豊年踊り

内容

樽上太鼓 音頭
踊り（どじょう踊り）

右は養老町文化財保護条例の規定により
養老町無形民俗文化財に指定する

昭和五十二年二月十六日

養老町教育委員会

豊年踊り

養文第四号

養老町重要文化財指定書

奉納算額

天保十二年
谷松茂 関

養老町高田

田代神社

右は養老町文化財保護条例の規定により
養老町重要文化財に指定する

昭和三十五年五月一日

養老町教育委員会

奉納算額

養文第二号

養老町重要文化財指定書

奉納額

天保八年鶴嶺写

諸色高値

養老町高田

田代神社

右は養老町文化財保護条例の規定により
養老町重要文化財に指定する

昭和三十一年五月一日

養老町教育委員会



奉納額

「山姥図」解説



この絵馬(77.5×64cm)は、文政十一年(一八二八)戊子首夏日、願主木邑氏から養老町高田の田代神社の御宝前に奉懸されたもので、画面も優れており、保存状態も良好で民俗資料としての価値とともに美術史的にも評価されるものであろう。

同社でも史実についての記録も口伝もないので詳細を知ることとはできないが、仮りに「山姥図」としてみると、幼児が逞ましく育って欲しいと願う子育て図であり一般的な構図である。

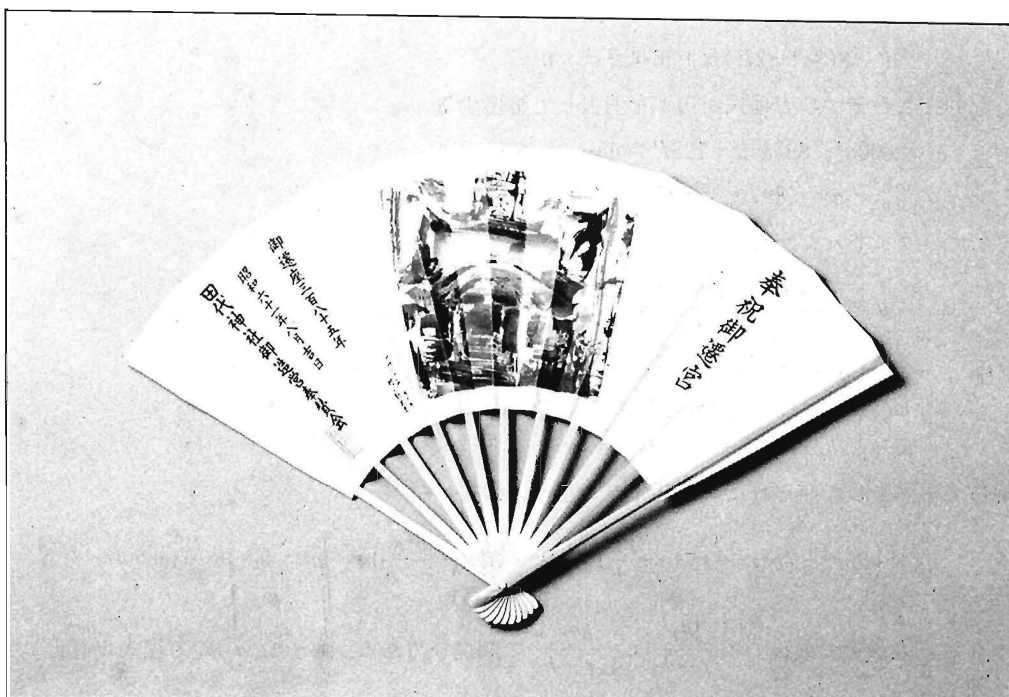
足柄山の金太郎の説話(伝説)にあやかり、山姥は山に住む妖女「山婆」ではなく、山の神に仕える巫女の零落した姿、あるいは山の神そのものを變形させた姿として民衆の心の依りどころとして描かれたものであろうとも言われる。ともあれ、精神的性格づけによるものであって、謙虚で敬虔な庶民の中の神に捧げる素朴な心情が窺われて楽しいものである。

(蛙)

(美濃の文化No.34より)



岐阜県神社庁創立30周年記念式典において
田代神社太鼓組に贈られた表彰状



昭和61年の御遷宮を記念して作られた扇子
 ※扇子画は、田代神社とかかわりがあり、「色の魔術師」
 といわれる村上肥出夫氏の作品

$$\begin{aligned}
 -B &= a^2 b^2 + a^2 r^2 + b^2 r^2 - b^2 OF^2 - a^2 C' F^2 = a^2 \left(\frac{l}{6} \right)^2 + a^2 l^2 + b^2 l^2 - b^2 l^2 - a^2 \left(\frac{5}{6} l \right)^2 \\
 &= \frac{1}{3} a^2 l^2 \dots\dots\dots (b)
 \end{aligned}$$

(a), (b)を次式に代入して整理すると

$$b^2 r A - 2 B x - 3 a^2 r x^2 = 0 \dots\dots\dots (5)$$

$$3 b^4 r^2 + 2 b^2 r A x - B x^2 = 0 \dots\dots\dots (6)$$

注(i) 上の二式は和算の研究雑論 I 109頁の(5)(6)

$$(3a^2 - 2l^2)l^2 + 72a^2 lx + 36 \cdot 9a^2 x^2 = 0$$

$$l^4 + 8(3a^2 - 2l^2)lx + 36 \cdot 4a^2 x^2 = 0$$

となり, この2つの方程式から x を消去して整理すると

$$360a^4 - 897a^2 l^2 + 128l^4 = 0 \dots\dots\dots (c)$$

$$\therefore a^2 = (897 \pm \sqrt{897^2 - 4 \cdot 360 \cdot 128}) / 720 \cdot l^2$$

ここで $a < l$ だから

$$a = \sqrt{\frac{897 - \sqrt{620289}}{720}} l$$

注(ii) 和算の研究 雑論 I, 117頁 中頃のつぎの2式:

$$b^2(a^2 + 2br - r^2) + 4a^2 bx + 3a^2 x^2 = 0$$

$$3b^3 r + 2b(a^2 + 2br - r^2)x + 2a^2 x^2 = 0$$

から x を消去して作られた a に関するつぎの方程式

$$\left(5br^3 - 7b^2 r^2 - r^4 + \frac{b^3 r^2}{r-b} \right) + \left(2r^2 + 3br - \frac{b^2 r}{r-b} \right) a^2 - a^4 = 0 \dots\dots\dots (d)$$

のうち a^2 の係数の最後の項 $\frac{b^2 r}{r-b}$ は $\frac{b^2 r}{4(r-b)}$ の間違いである. 従って (d) の方程式を訂正して

$b_1 r$ にそれぞれ $r = l$, $b = l/6$ を代入して整頓すると (c) が得られる.

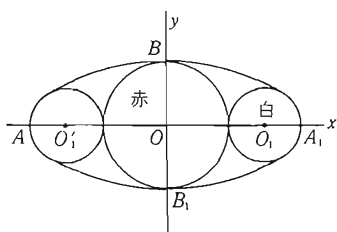


図 8

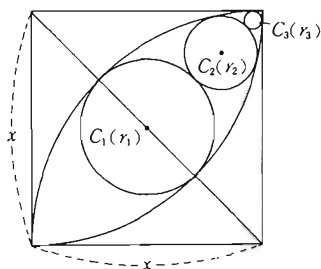


図 9

また図 9 で r_3 を知り a を求める.

$$\begin{aligned} x &= \sqrt{2}(\sqrt{2}+1)r_1 = \sqrt{2}(3+\sqrt{2})r_2 \\ &= \sqrt{2}(17+\sqrt{2})r_3 \end{aligned}$$

これを(5)に代入すると

$$a = \sqrt{2}(17+\sqrt{2})(3+\sqrt{2}-\sqrt{9+6\sqrt{2}})r^3.$$

注 この解答は直井功教諭によるものである.

第 5 問題

与えられた正方形の内に 2 個の半円弧を書き楕円と甲乙丙の 10 個の円を入れる (乙円は半円である). 楕円の短径が丙円の直径に等しいとき楕円の長径を求めよ (図 10).

術 文 (答) $\sqrt{(897-\sqrt{620289})/720}$ (正方形の一边)

注 原問題の答の中で不明の部分は筆者の推定であって(1)は七, (2)は側とする (第 10 図).

解 法

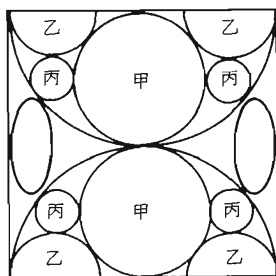


図 10

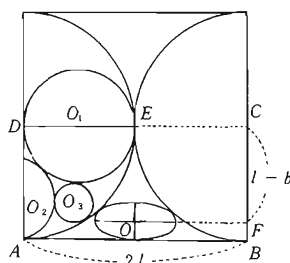


図 11

正方形の一边を $2l$ とすると円 O_1 , O_2 , O_3 の半径はそれぞれ $l/2$, $l/3$, $l/6$ (図 11)

$$\text{楕円を } \frac{x^2}{O^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1$$

とすると, 題意から $b = \text{円 } O_3 \text{ の半径 } l/6$

また, 和算の研究 雑論 I [(3)] 109 頁から

$$A = a^2 + b^2 + r^2 - OF^2 - C'F^2 = a^2 + \left(\frac{l}{6}\right)^2 + l^2 - l^2 - \left(\frac{5}{6}l\right)^2 = a^2 - \frac{2}{3}l^2 \quad (a)$$

を得る.

第4問題

正方形内に4分円弧を書き、その内に円弧に接する最大な青円を書き、順次に接する黄、黒円2個ずつ入れる.

そして正方形の二辺に長軸と短軸が夫々平行になるような楕円が正方形と円弧に接している. その楕円に内接する最大な赤円を書き、この赤円と楕円の長軸の端でこの楕円に接する円を白円とする. 黒円が与えられているとし、白円が最大となるような楕円の長軸の長さを求めよ (第9図).

術文(答)

$$p = \sqrt{6054 + 4014\sqrt{2}} \quad \text{とすると}$$

$$\text{長軸} = (40 + 53\sqrt{2} - p) \cdot \text{黒径}$$

$$= \sqrt{2}(17 + \sqrt{2})(3 + \sqrt{2} - \sqrt{9 + 6\sqrt{2}}) \cdot \text{黒}$$

解法

$$\text{楕円 } O : \frac{x^2}{a^2} + \frac{y^2}{b^2} = 1$$

とし正方形の一边を x とすると (図7), 楕円 O が円 C に点 P で接し楕円の点 P での法線 PHO の長さを R とするとき次ぎの2つの基公式が成り立つ

の2つの基公式が成り立つ

$$b^2(b^2 - aR)x^2 + 2ab^2R(a - R)x + a^2R^2(b^2 - aR) = 0 \quad \dots\dots\dots(1)$$

$$b^2(b - R)x^2 - 2R(a^2R - b^3)x + a^2R^2(b - R) = 0 \quad \dots\dots\dots(2)$$

$$(1) \times (b - R) - (2) \times (b^2 - aR)$$

$$aR^2 = b^3 \quad \therefore R = b \sqrt{\frac{b}{a}} \quad \dots\dots\dots(3)$$

(3)を(2)に代入すると

$$x^2 - 2(a + b + \sqrt{ab})x + ab = 0 \quad \dots\dots\dots(4)$$

次ぎに白円 O_1 が楕円周と A で接し赤円が B で接するから (図8), その条件は $b = \frac{a}{2}$

これを(4)に代入すると

$$a^2 - 2(3 + \sqrt{2})ax + 2x^2 = 0$$

$$\therefore a = (3 + \sqrt{2} \pm \sqrt{9 + 6\sqrt{2}})x$$

複号士は負をとって

$$a = (3 + \sqrt{2} - \sqrt{9 + 6\sqrt{2}})x$$

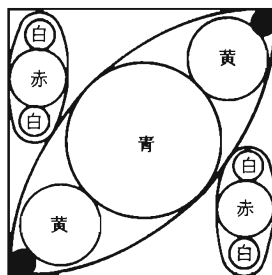


図 6

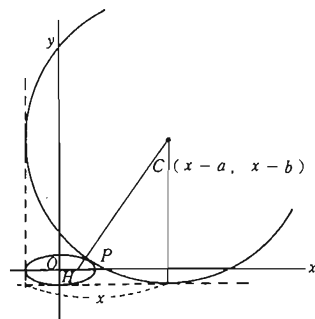


図 7

$$\therefore d = \frac{2}{\sqrt{\pi}} a \approx 1.128 a$$

第2問題

与えられた正方形の中へ4個の等円を入れる。黒い部分の面積を知って等円の直径を求めよ(第7図)。

術文(答)

$$\text{等円の直径} = \sqrt{(\text{黒い面積}) / (1 - \pi/4)} \cdot \frac{1}{2}$$

現代的解法

求める等円の直径を d ，黒い部分の面積を S とする(図4)。

$$\begin{aligned} 4\pi\left(\frac{d}{2}\right)^2 + S &= (2d)^2 \\ \therefore (4 - \pi)d^2 &= S \\ \therefore d &= \sqrt{S/(4 - \pi)} \\ &= \frac{1}{2} \sqrt{S/(1 - \pi/4)} \end{aligned}$$

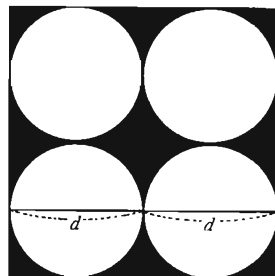


図 4

第3問題

正方形の内に2個の斜線を作り甲の正方形3個と乙正方形1個を入れる。甲正方形の一辺の長さを知って乙正方形の一辺の長さを求めよ(第8図)。

術文(答)

$$\text{乙正方形の一辺} = (\sqrt{5} - 1)/2 \text{ (甲正方形の一辺)}$$

現代的解法

(其の1)

求める乙正方形の一辺を x ，甲正方形の一辺を a とすると斜線の部分は相等しい(図5)，依って次の方程式が得られる。

$$x(x + a) = a^2$$

$$\text{これから } x = (\sqrt{5} - 1)/2 \cdot a.$$

(其の2)

直角三角形 ABC で(図5)

$$BC^2 + AC^2 = AB^2 = (AD + DB)^2$$

すなわち

$$\begin{aligned} (x + a)^2 + (x + 2a)^2 \\ = (\sqrt{(x + a)^2 + a^2} + \sqrt{x^2 + a^2})^2 \end{aligned}$$

これから

$$(x^2 + ax - a^2)^2 = 0$$

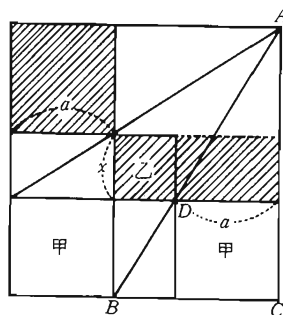
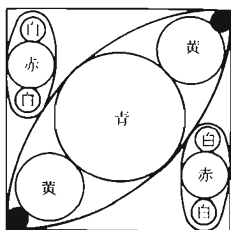


図 5



第 9 図

(第四問題)

今有如図平方内設最多弧背二条容側円円柱斜截之其截面形名側円及青黄赤白黒一
十一円只云黒径若干問最多側円長径術如何

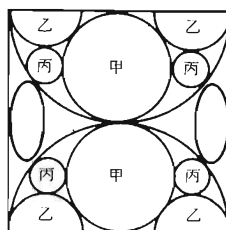
答曰置方斜率四千百零四之加六千零五十四個得平方開之号極置
方斜率五十三之加四十零個得内減極餘乘黒径得最多側円長径

関流

谷松茂門人

土屋武三郎信篤

謹考



第 10 図

(第五問題)

今有如図平方内設弧背二条容側円及甲乙丙乃乙者半円也而使側
円短径如丙円径只云方面若干問得側円長径術如何

答曰置六十二万零二百八十九個平方開之以減八百九十七個餘
以〔不明〕百二十零個除之平方開之得乘方面得〔不明〕⁽²⁾円長
径

同門

土屋恭二郎信義

謹考

題 意

第 1 問題

与えられた正方形に等しい面積を持つ円の直径を求めよ (第 6 図).

術 文 (答)

円の直径 = $1.12 \cdot (\text{正方形の一边})$

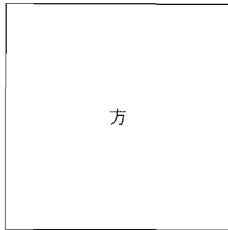
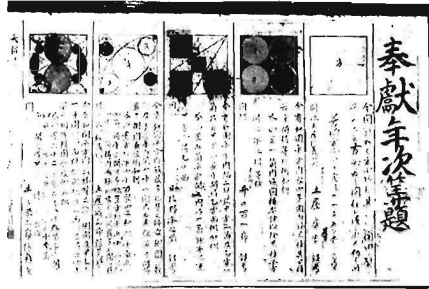
現代的解法

与えられた正方形の一边の長さを a として求める円の直径を d とすると

$$\pi \left(\frac{d}{2} \right)^2 = a^2$$

3. 養老郡養老町高田 田代神社 天保12年(1841) 5問題

田代神社の算額



第 6 図

(第一問題)

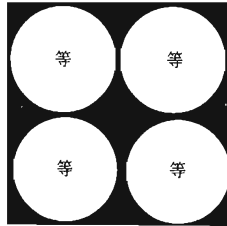
今図能如く方面阿梨其(三字不明)円田を繁と欲寿只云方面若干
円径を得る術如何にと問

答曰方面残置定法一一二を乗して得る

十二歳童

関流 土屋信義門人

土屋 房吉 謹考



第 7 図

(第二問題)

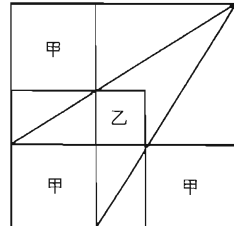
今有如図平方内容四等円而設黒積其黒積若干問得等径術如何

答曰置一個減円積率餘以除黒積平方開之半之得等径

同門

十三歳童

井口百一郎 謹考



第 8 図

(第三問題)

今有如図平方内隔二斜容甲方及乙方一個只云甲方面若干問得乙方
面術如何

答曰置五個平方開之内減一個餘半之乘甲方面得乙方面

同門

十一歳童子

日比野平之亟 謹考

あとがき

この社誌は純粹の學術書ではありません。氏神様と氏子をつなぐ絆ともなればと、素人の私達が手探りで、愛情を込めて編纂した手作りの記録集でございます。

ですから、未熟な記述が至る所に見られると思います。どうかご遠慮なく、お気づきの点を教えて下されば嬉しいと存じます。

編集会議延べ二十回、二年と一ヶ月かかってようやく出来上がりました。予定が大幅に遅れました。ごめんなさい。

玉稿をいただきました前神社庁長宇都宮敢先生、神社庁長宇都宮正先生、神社庁副庁長森磐根先生、高木清治様、岩間泉様、おかげさまで錦上花を添えていただき、まことに有難うございました。

太鼓組の氏子各位、写真師組合の皆様、故栗本雄先生、高木重之先生、柏淵節様、藤井一様、それぞれ貴重な資料をご提供いただき、厚く感謝申しあげます。

長い間、編集から発行に至るまでのご指導ご協力をいただきました(株)菱和都市開発の社長埜本修様、福谷

元志主任様及びスタッフの皆様、採算抜き親身のご奉仕でした。最後になりましたが深く御礼申しあげます。

昭和六十二年 師走

田代神社誌編纂委員会

山田良造

細川勇

吉田實

佐々木勇

大橋正廣

田代神社誌（非売品）

昭和六十二年十二月二十八日発行

編纂者 田代神社誌編纂委員会

発行所 田代神社社務所

岐阜県養老郡養老町高田

二五九番地の一

印刷所 中日本印刷株式会社

名古屋市中区新栄一―七―二二
